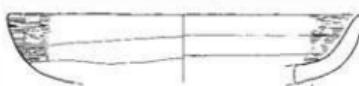


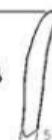
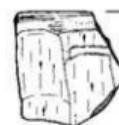
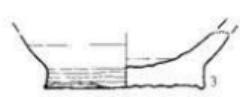
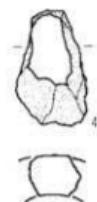
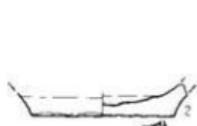
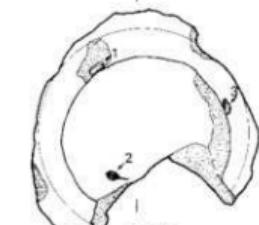
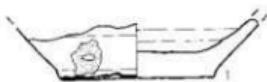
ST09



SK01



SK03

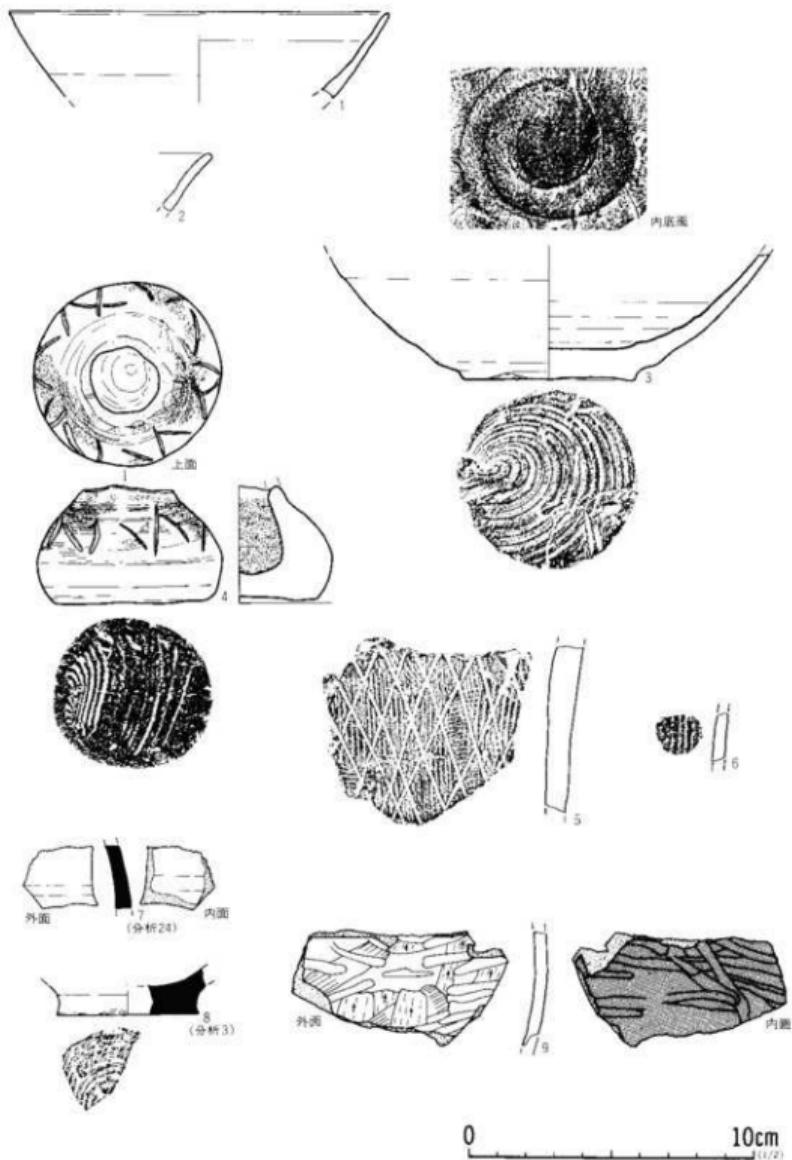


SK16

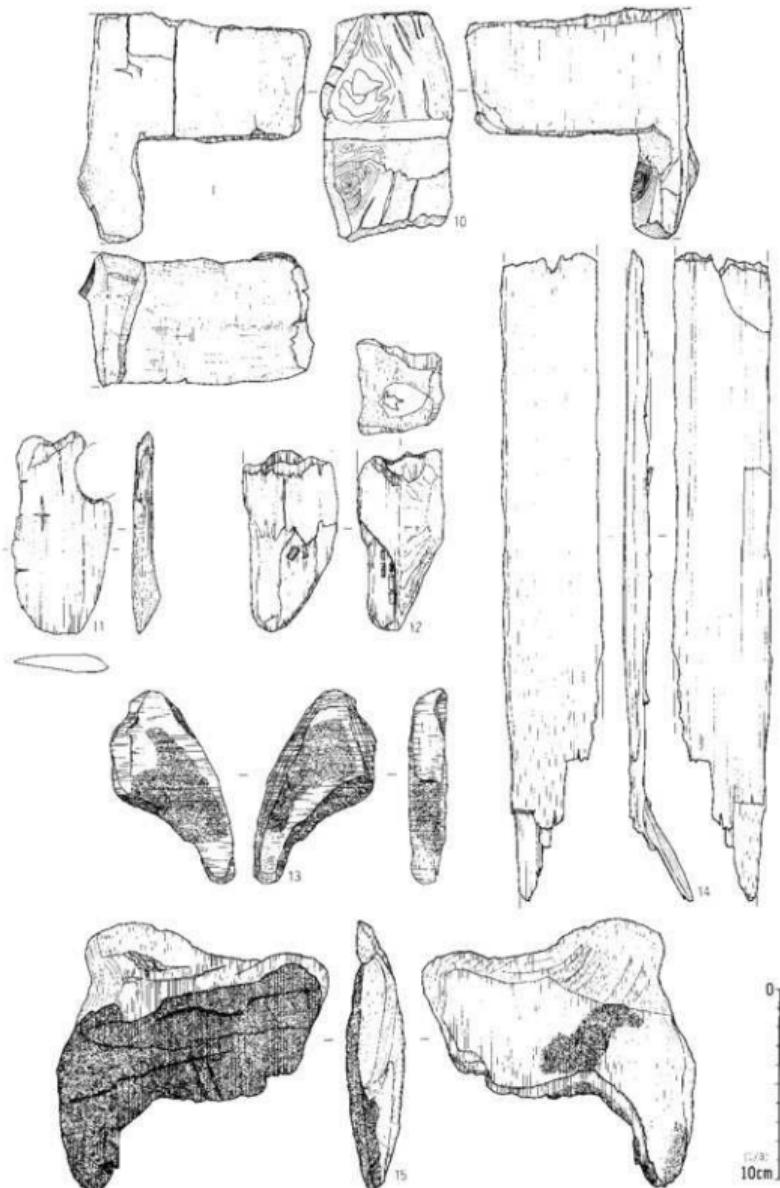
0

10cm
(1/2)

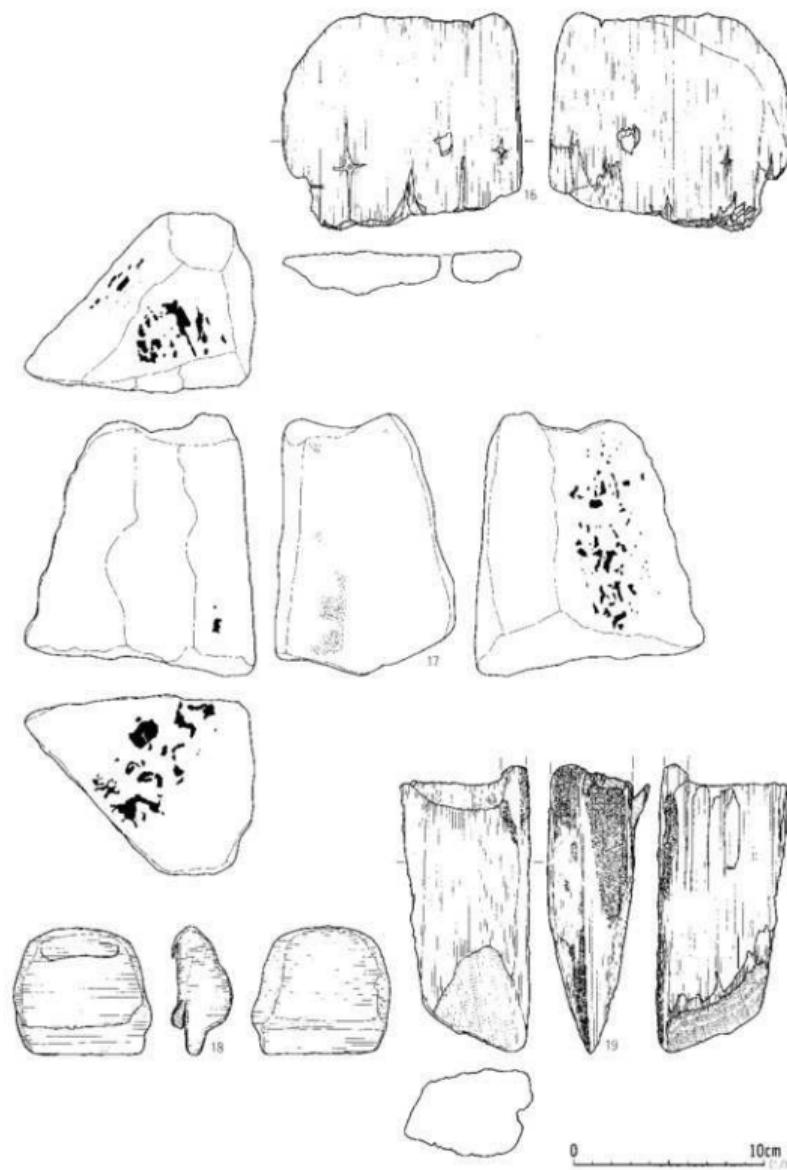
第42図 ST08、ST09、SK01、SK03、SK16出土遺物



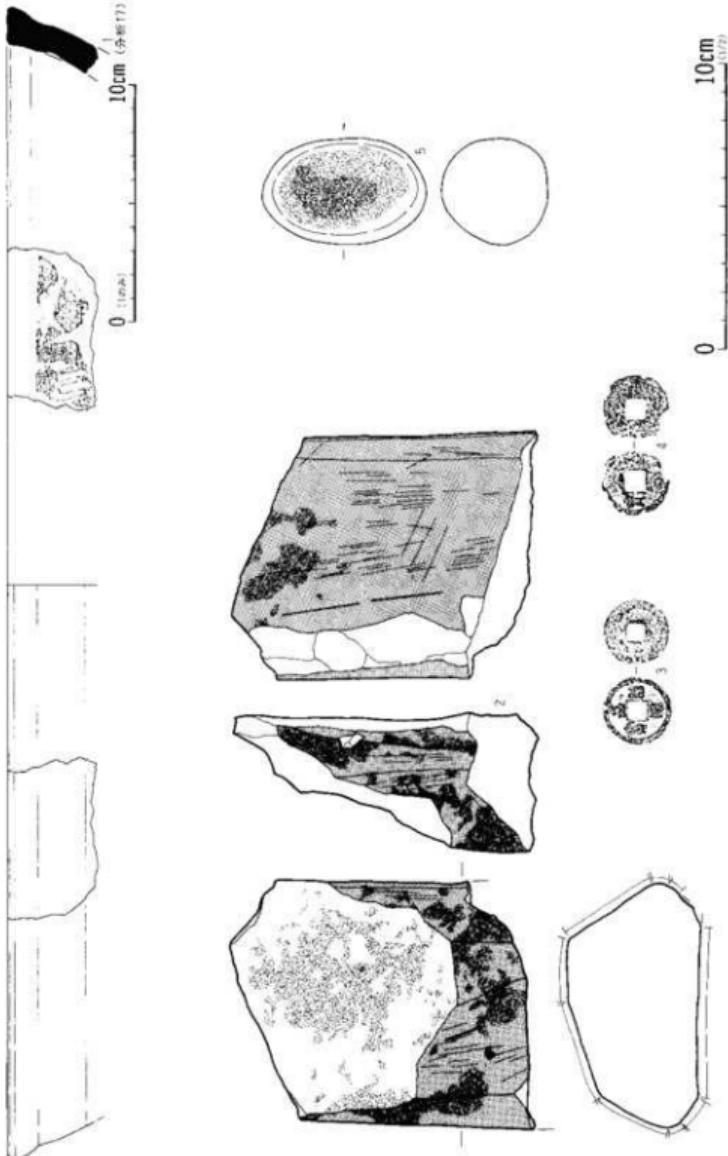
第43図 SEO 4出土遺物



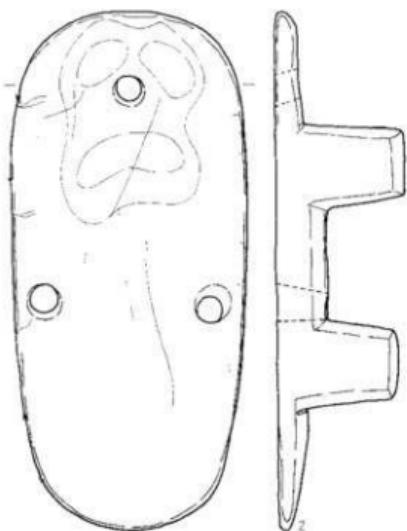
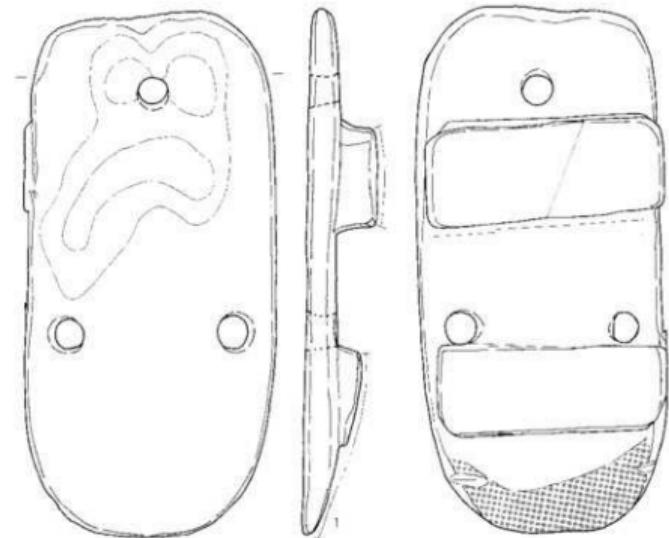
第44図 SE04出土遺物



第45図 SEO4出土遺物

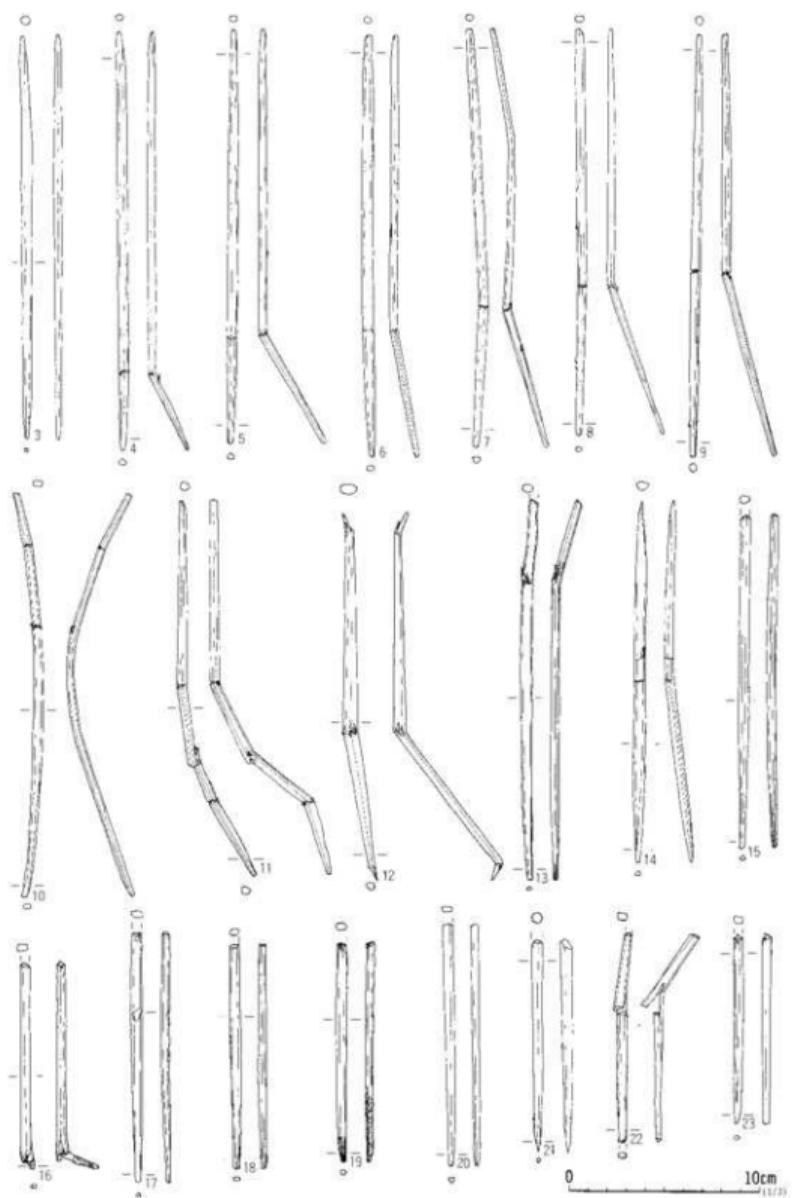


第46図 SE05出土遺物

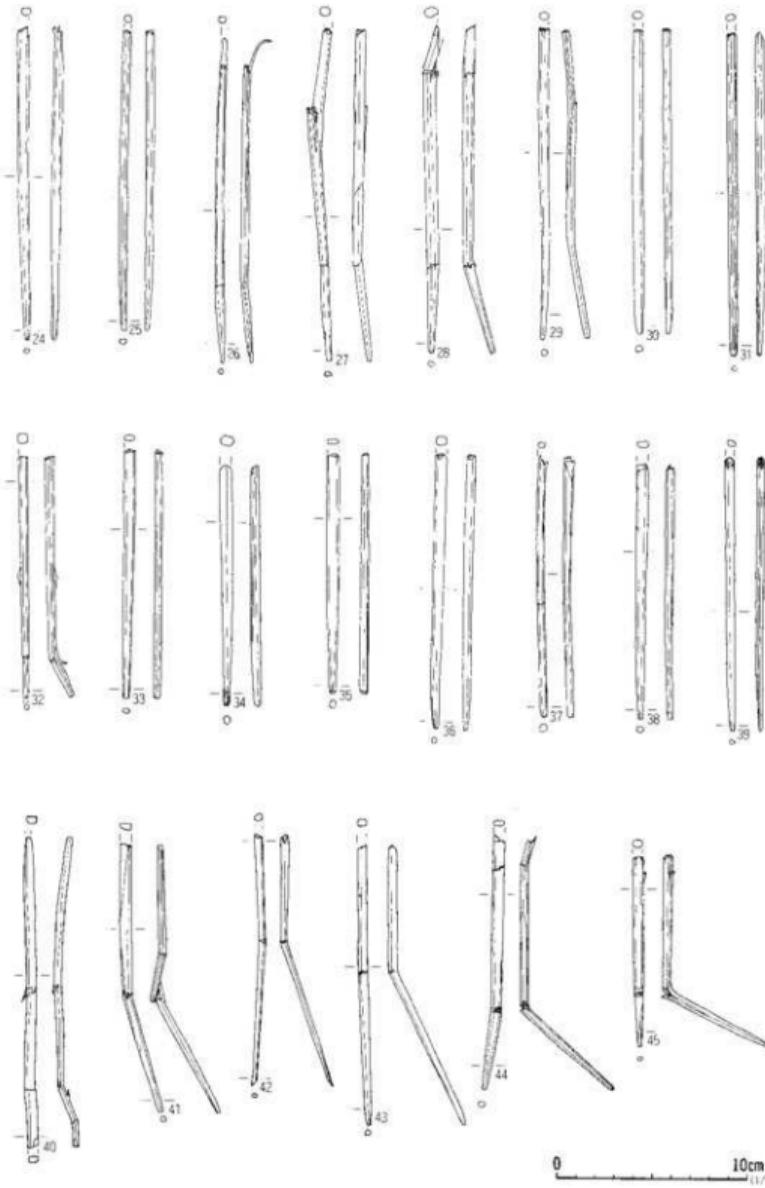


0 10cm
1/25

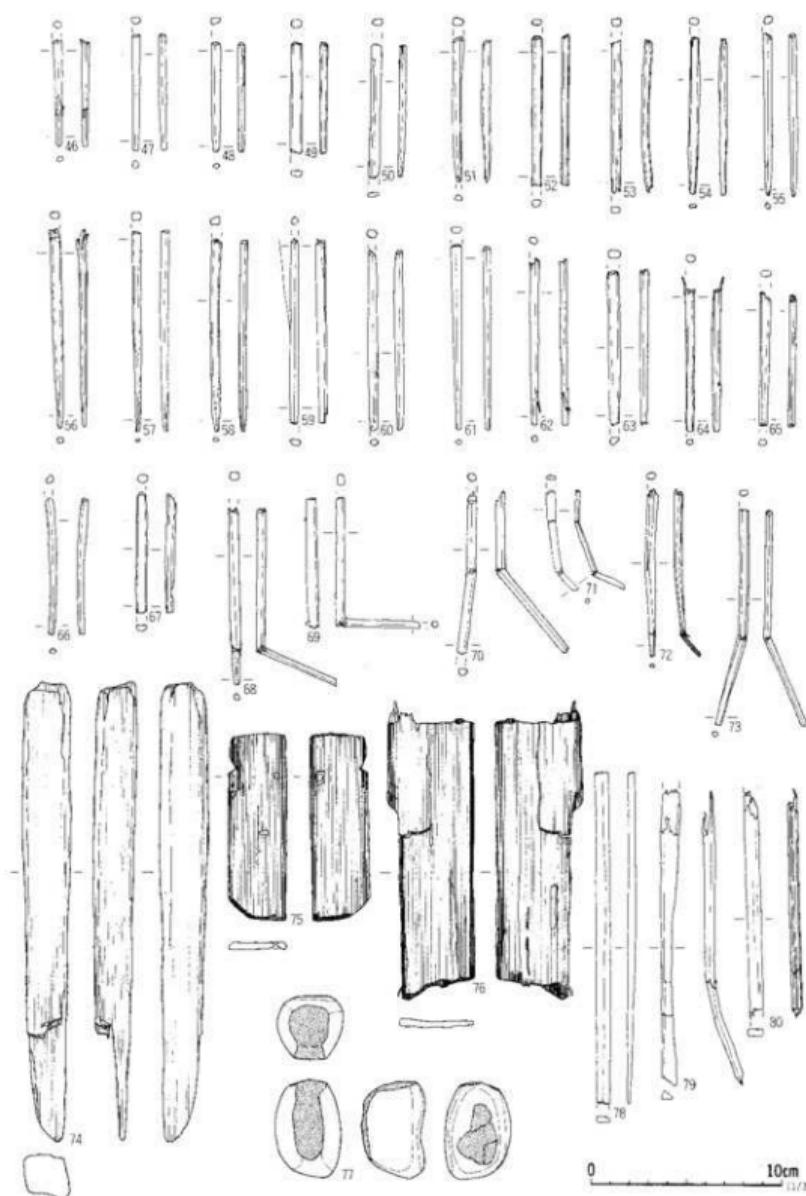
第47図 SE06出土遺物



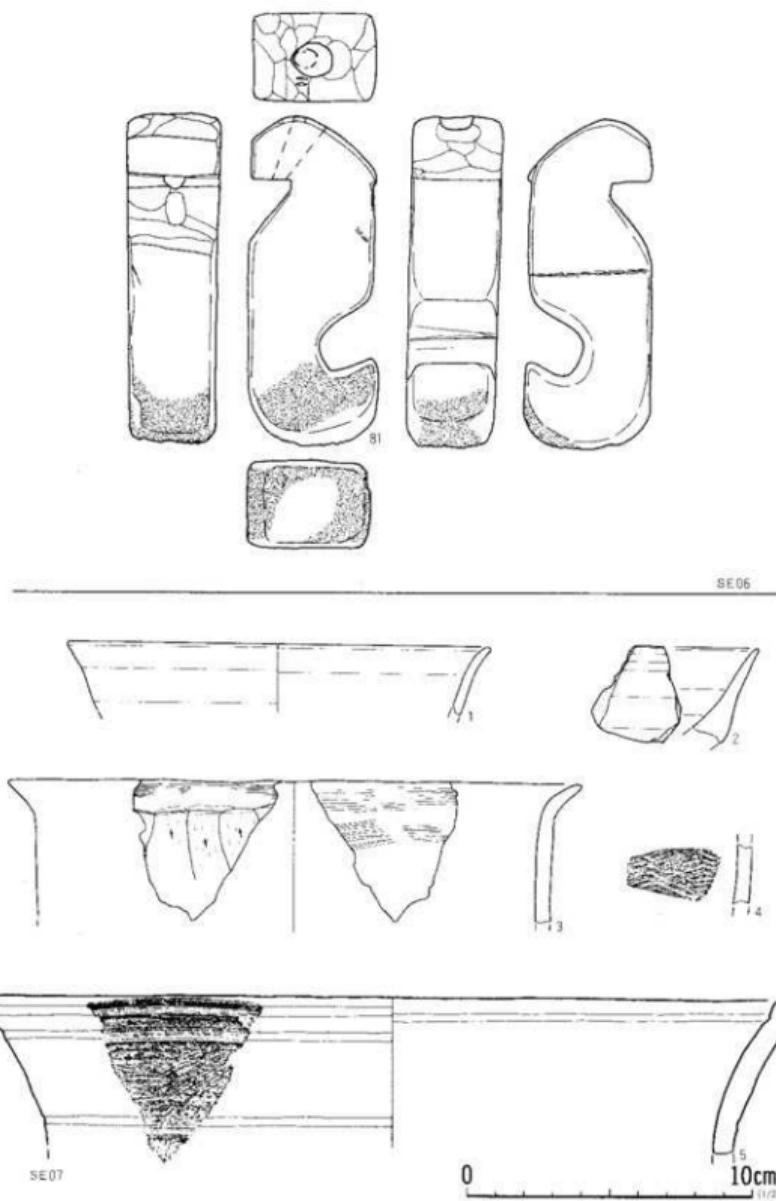
第48図 SE06出土遺物



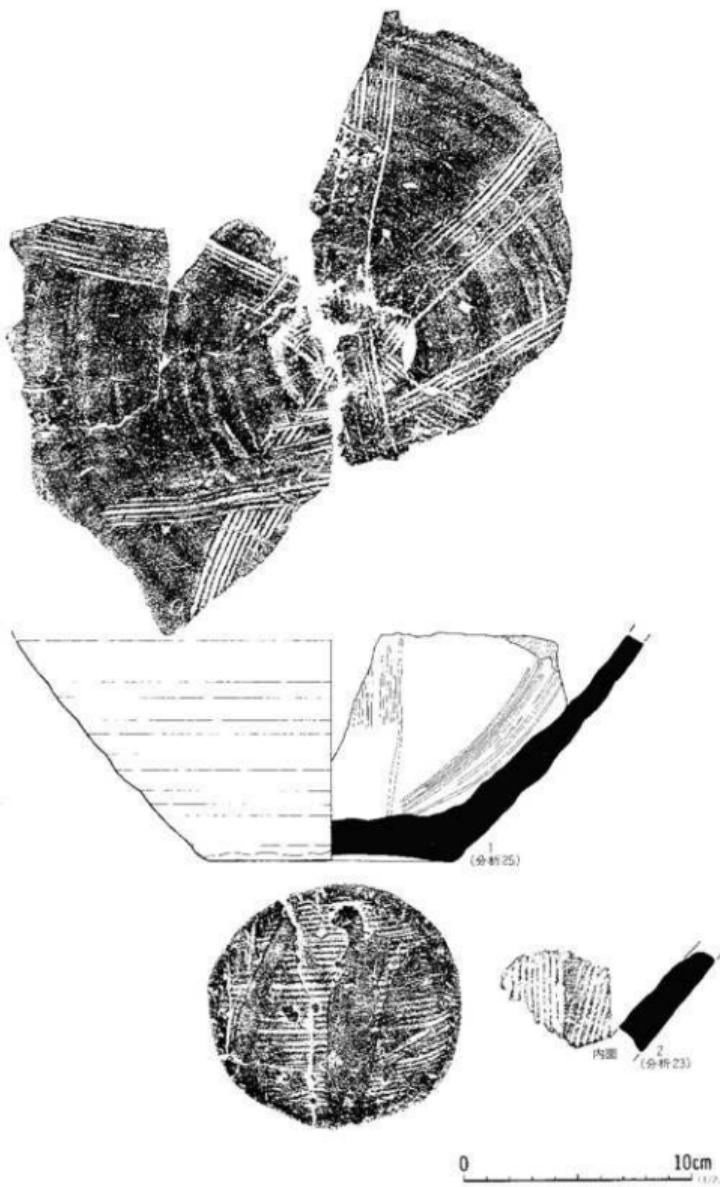
第49図 SEO6出土遺物



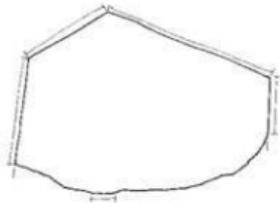
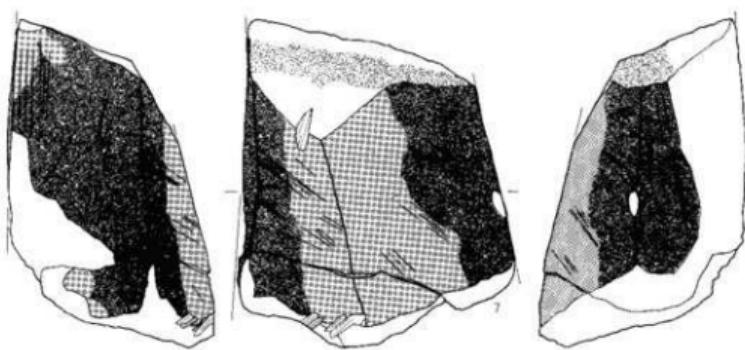
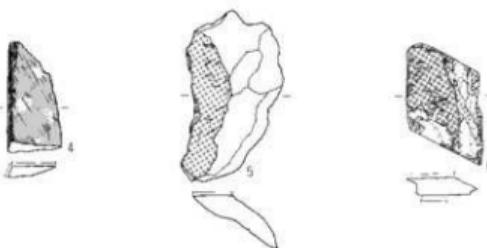
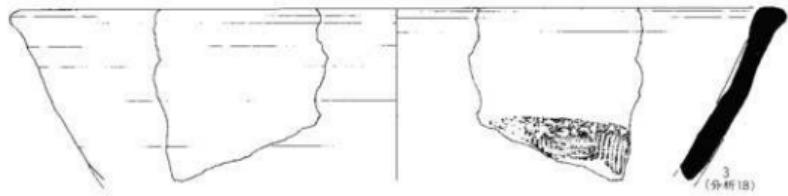
第50図 SE06出土遺物



第51図 SE06、SE07出土遺物

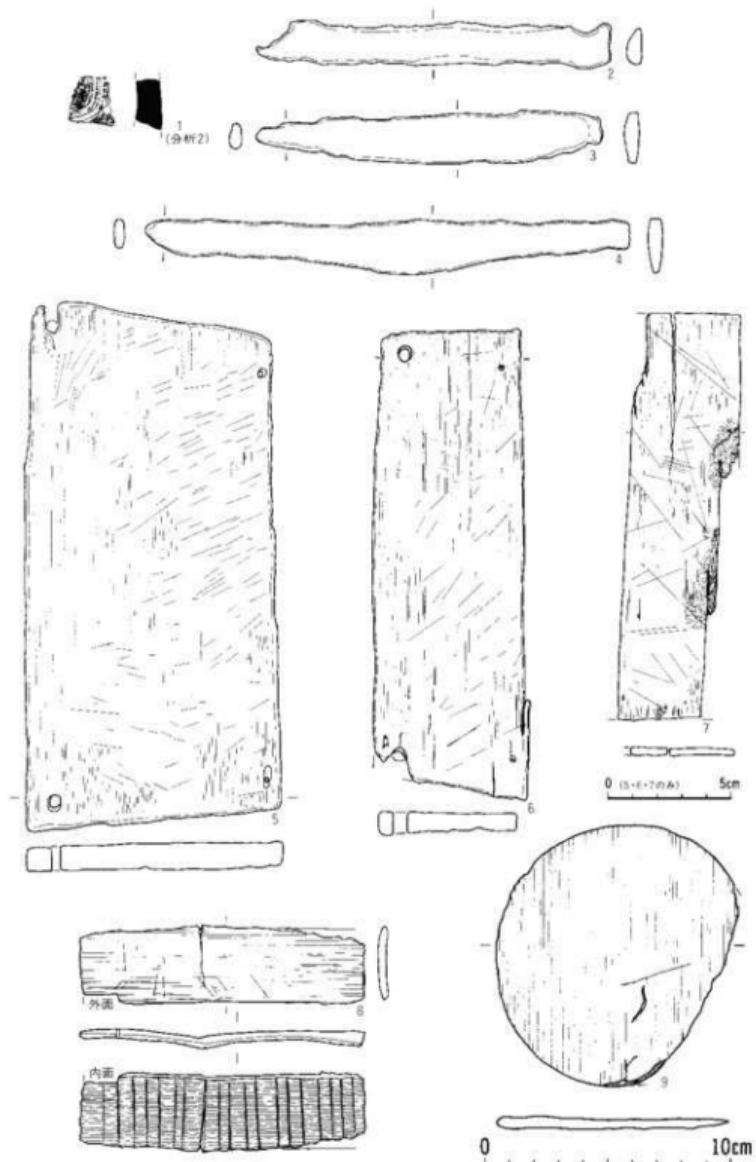


第52図 SE08出土遺物

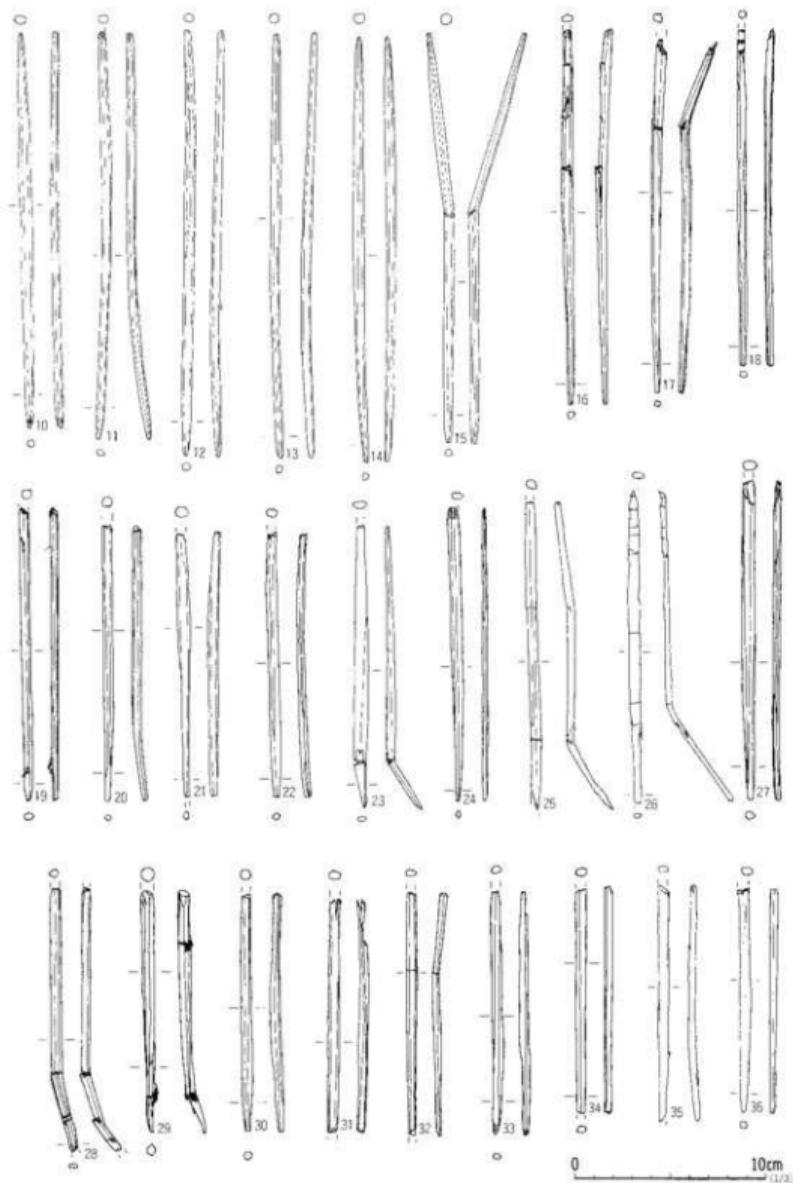


0 10cm
(1/2.5)

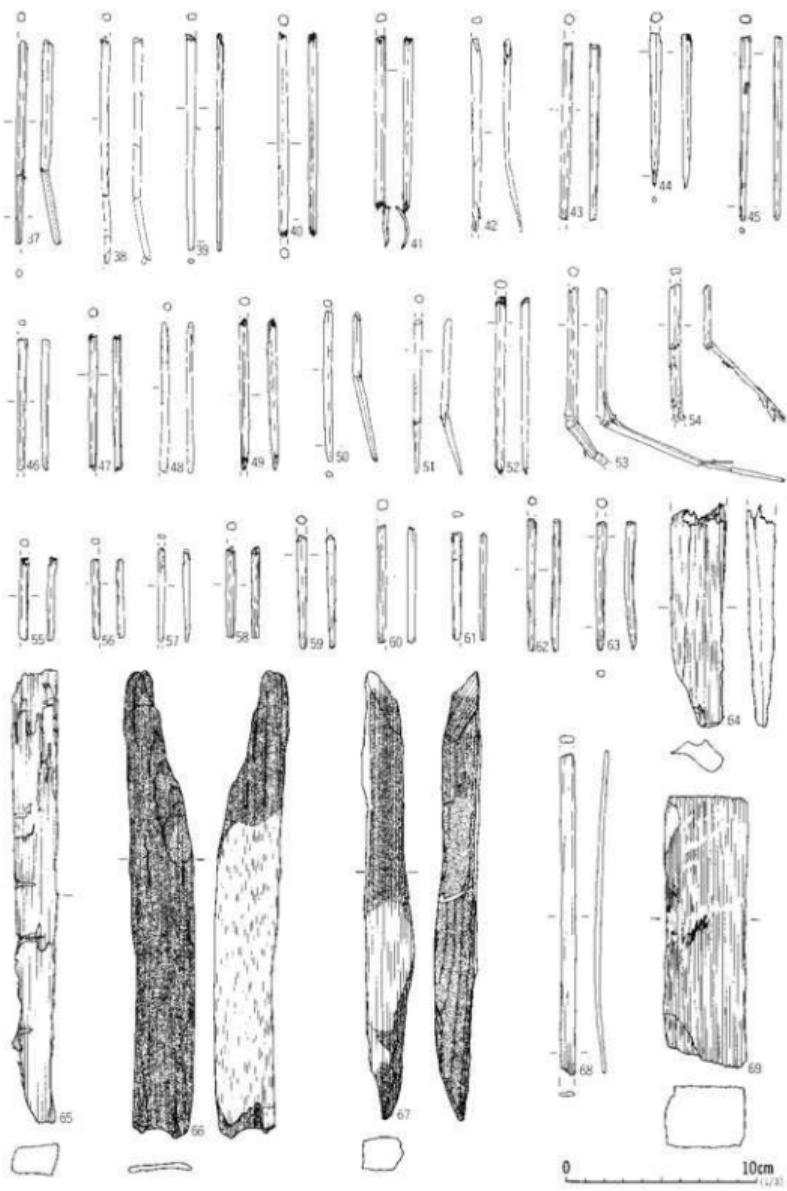
第53図 SE08出土遺物



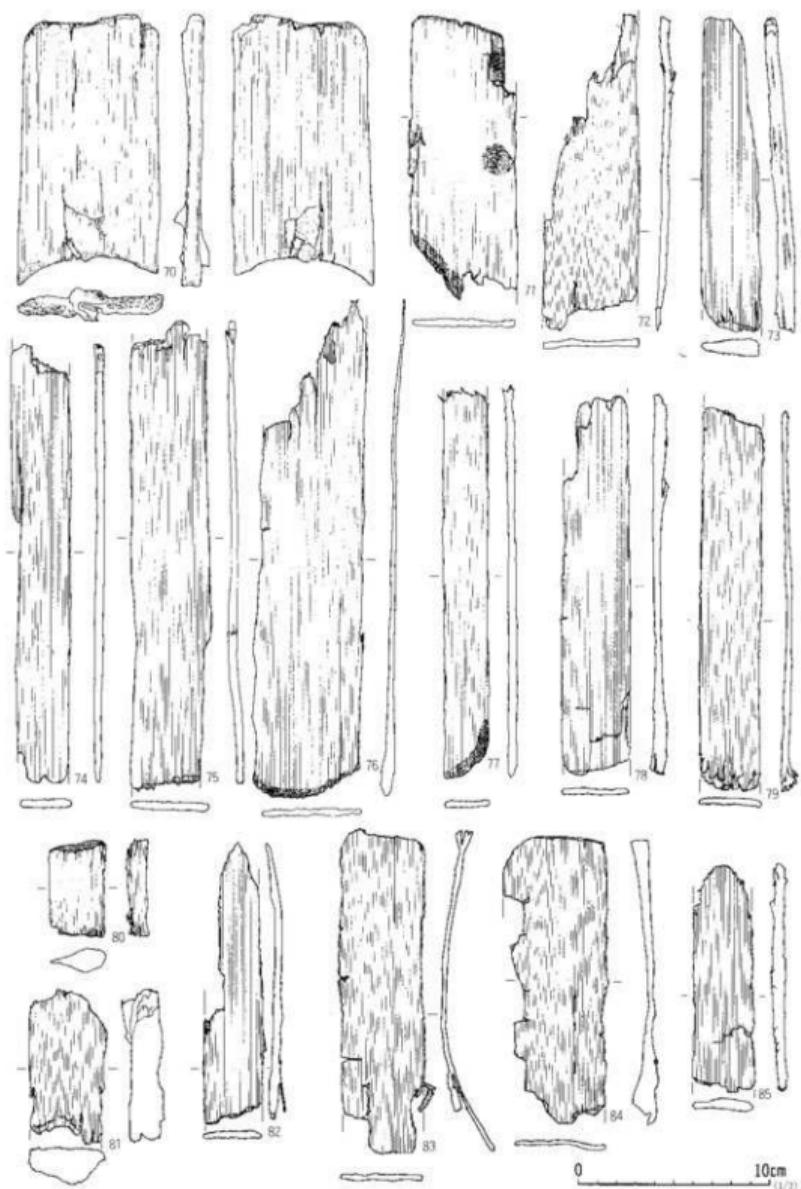
第54図 SE09出土遺物



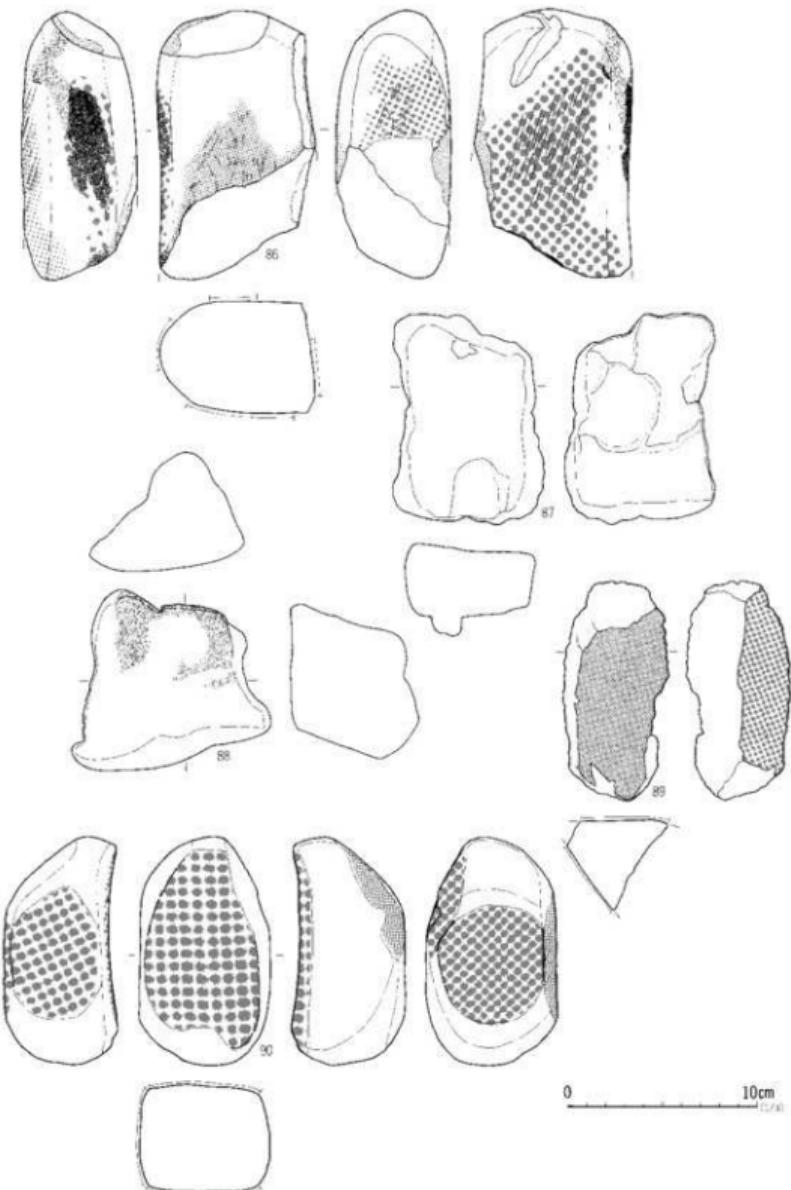
第55図 SE09出土遺物



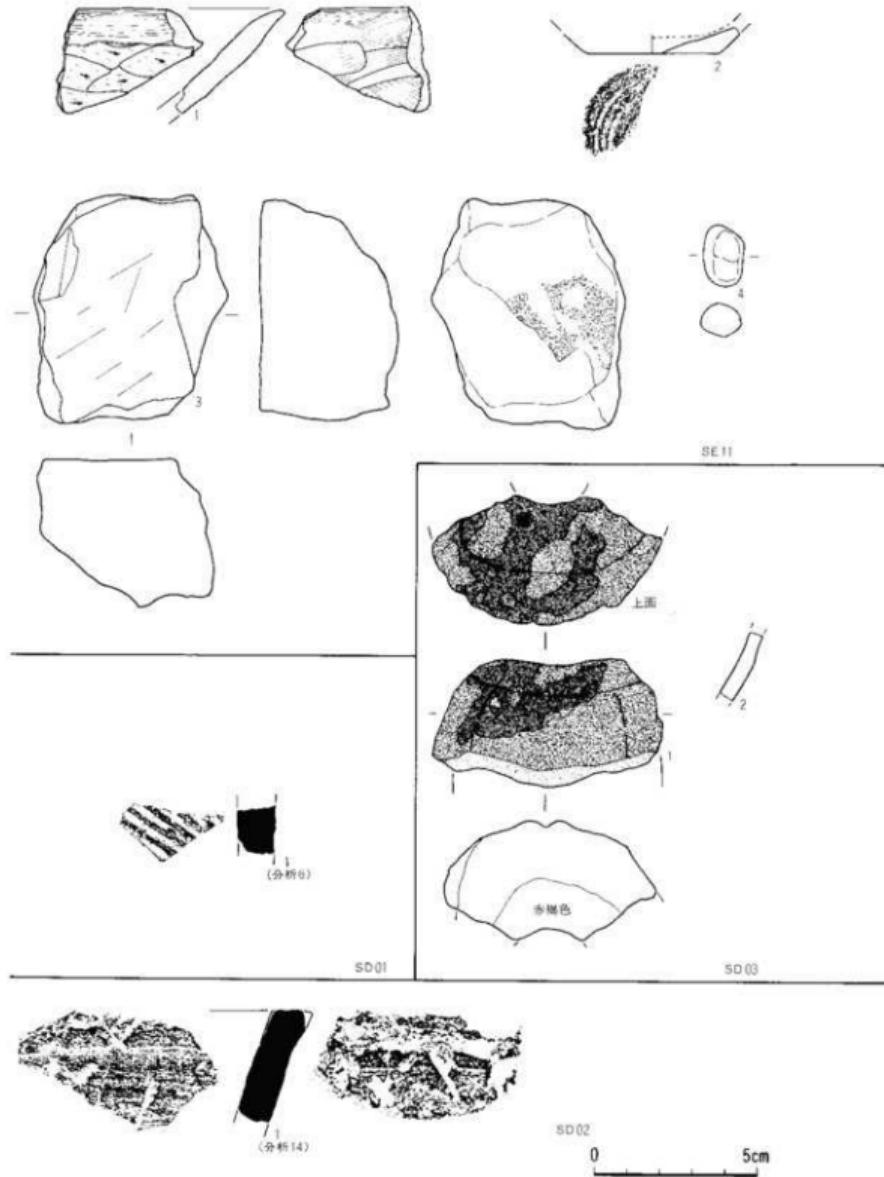
第56図 SEO9出土遺物

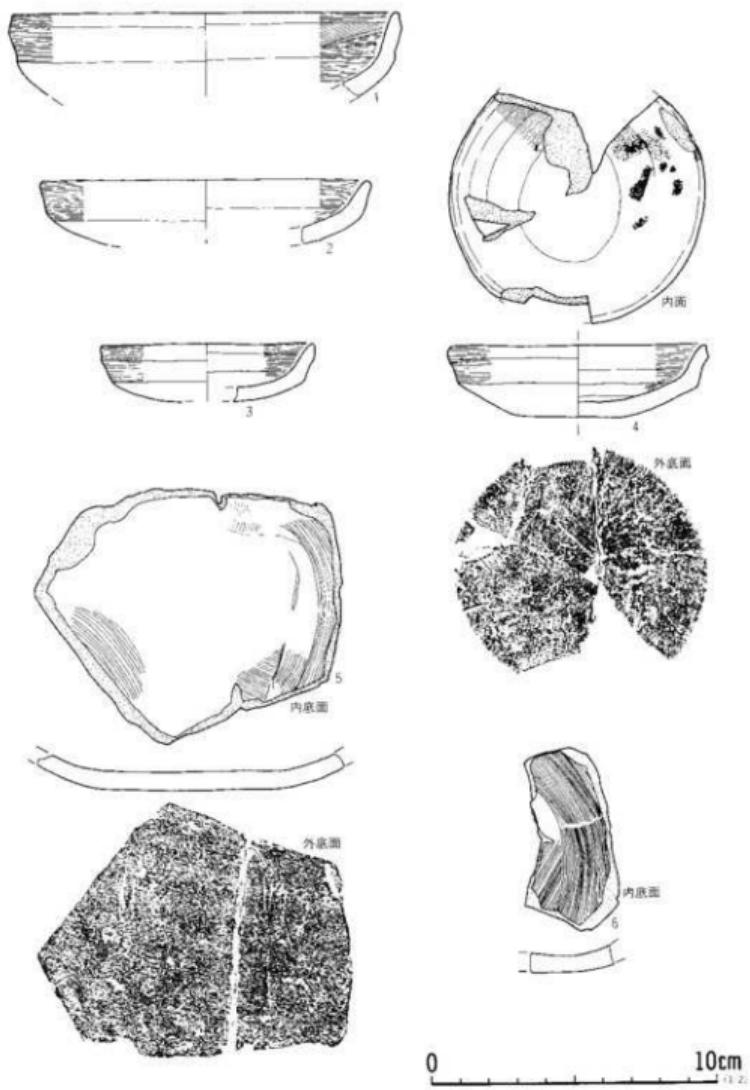


第57図 SEO9出土遺物

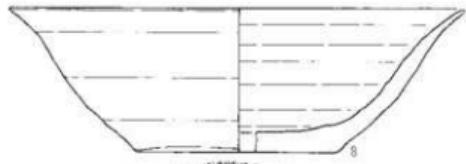
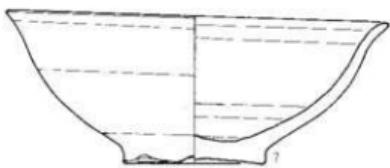
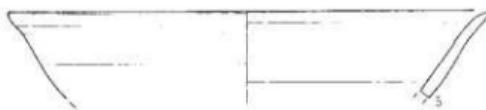
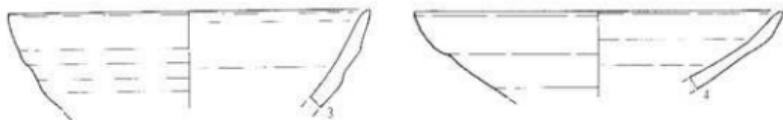


第58図 SE09出土遺物

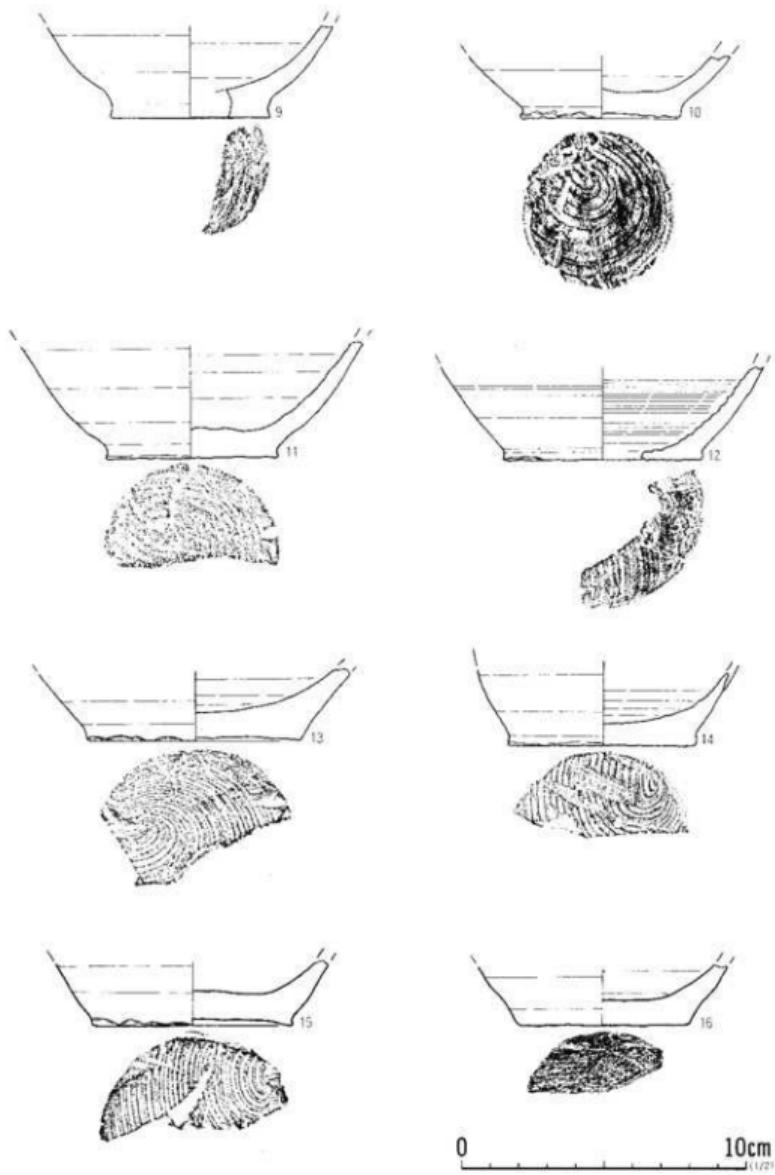




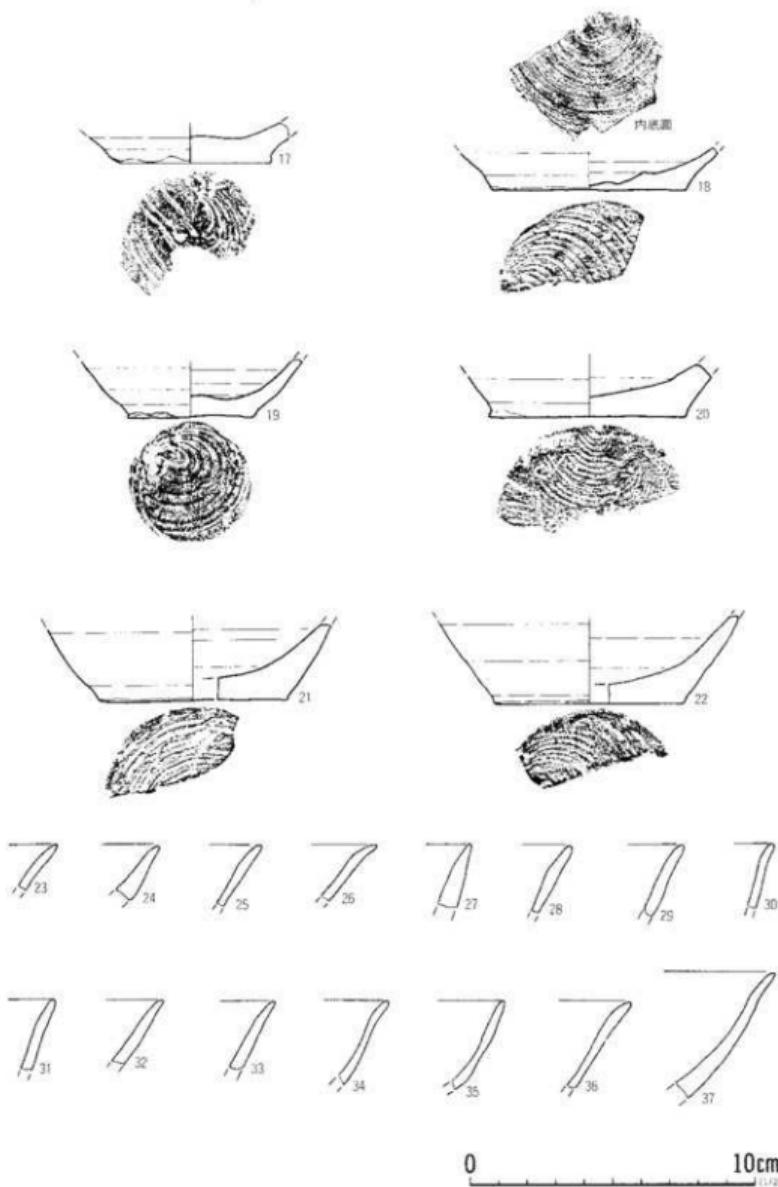
第60図 SX02出土遺物



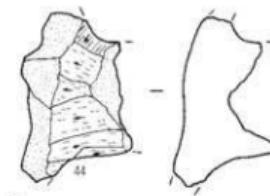
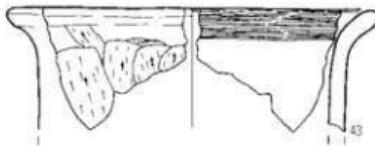
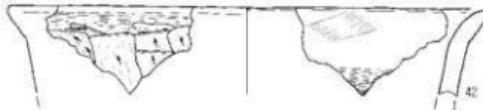
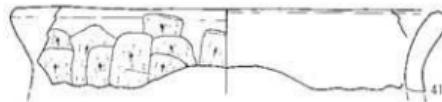
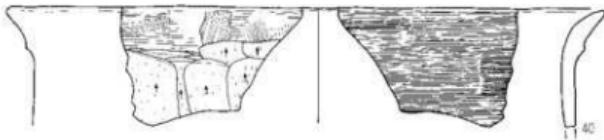
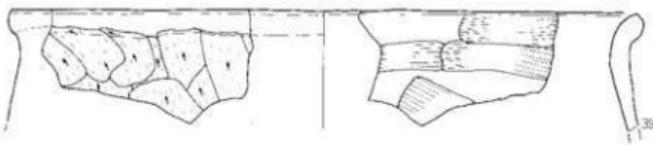
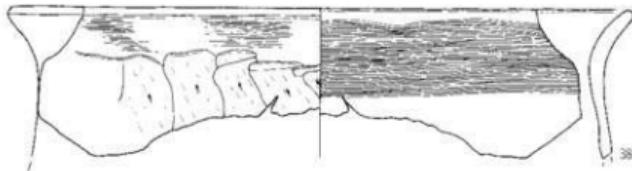
第61図 遺構外出土遺物



第62図 遺構外出土遺物

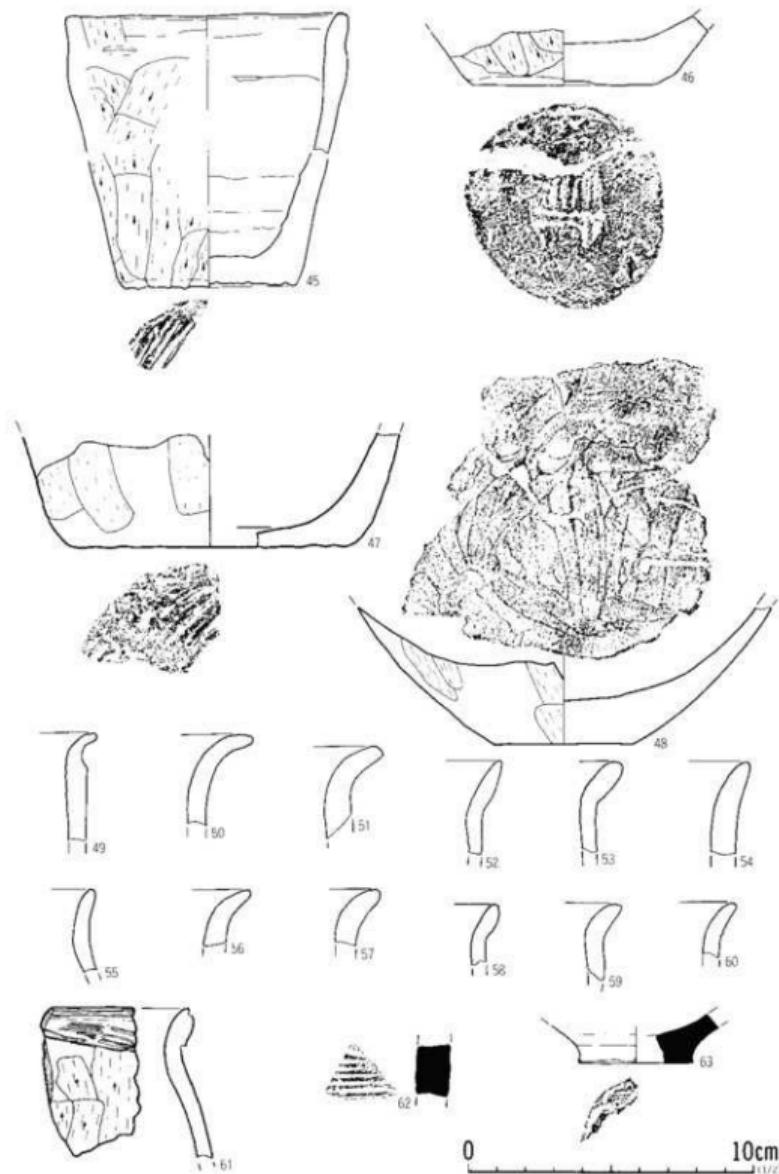


第63図 遺構外出土遺物

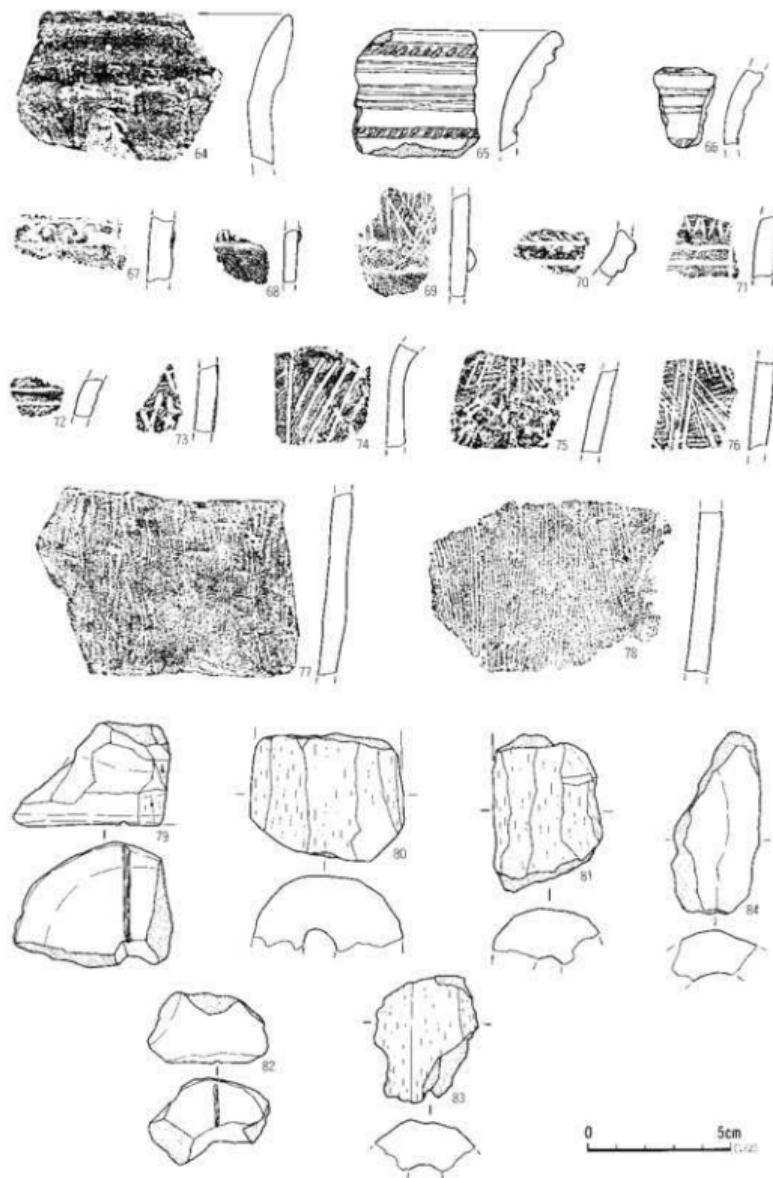


0 10cm
(1/2)

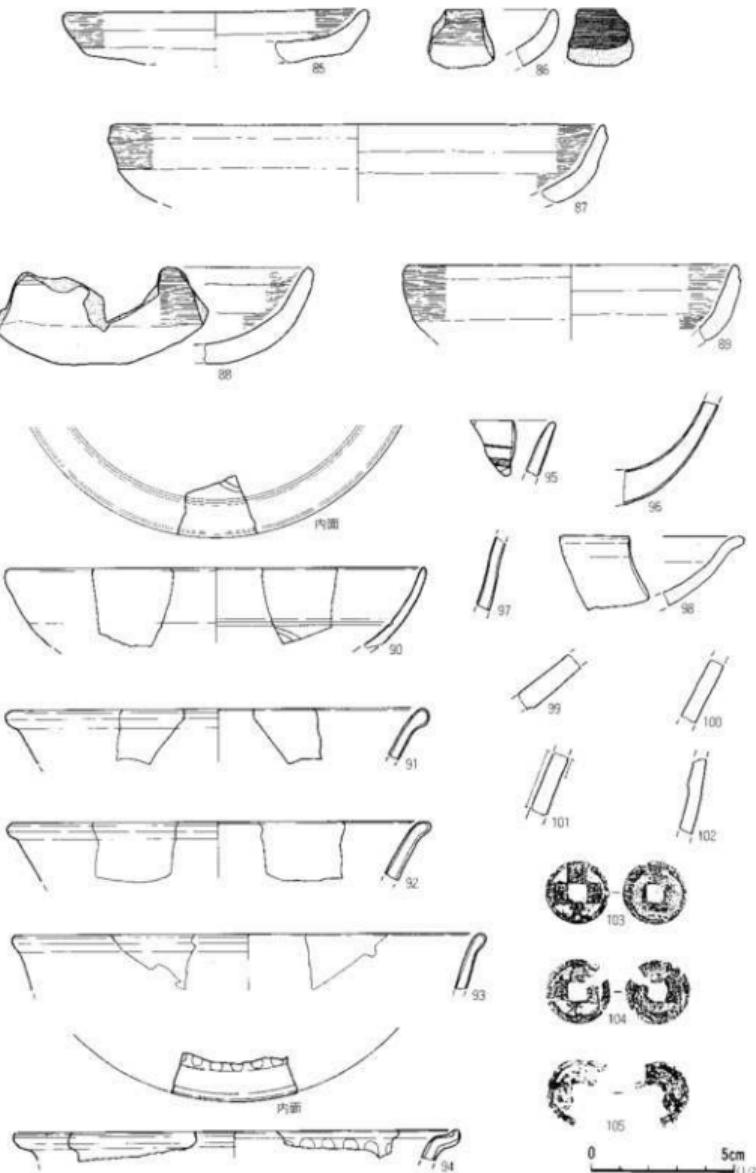
第64図 遺構外出土遺物



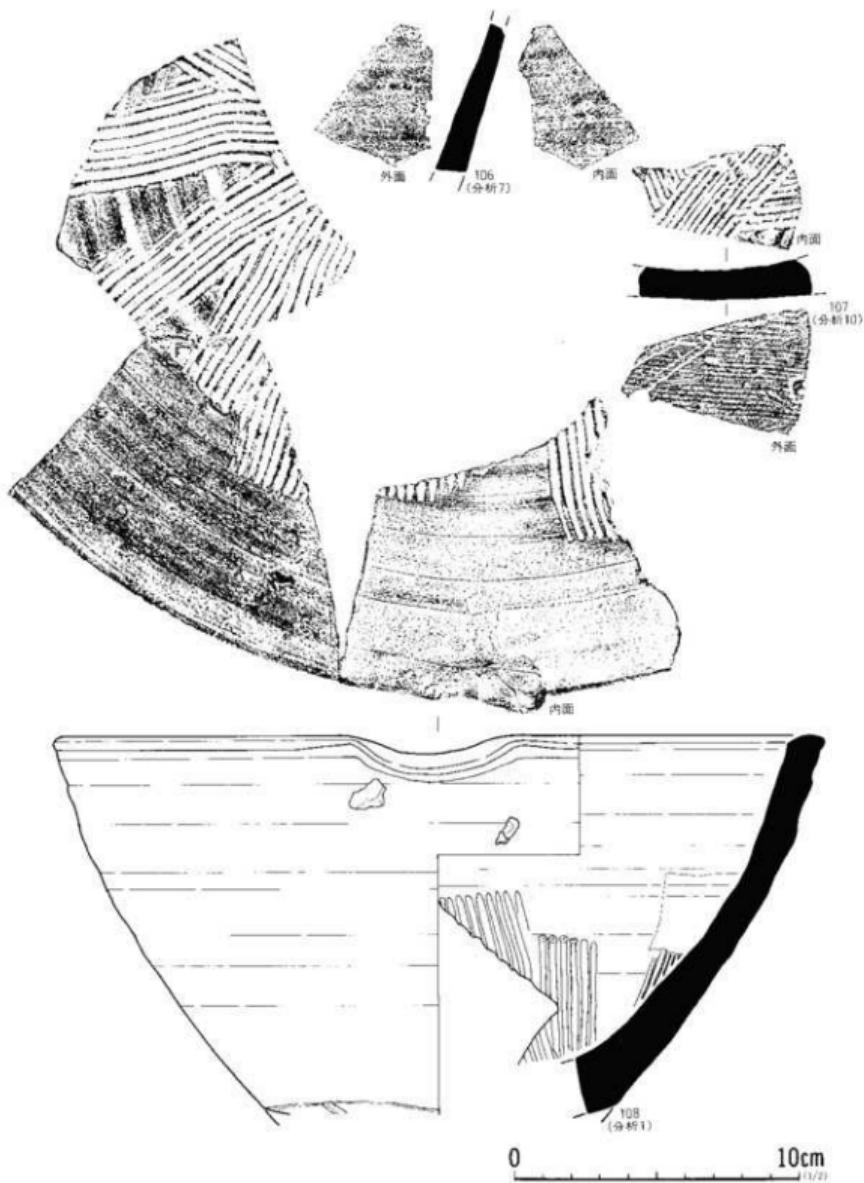
第65図 遺構外出土遺物



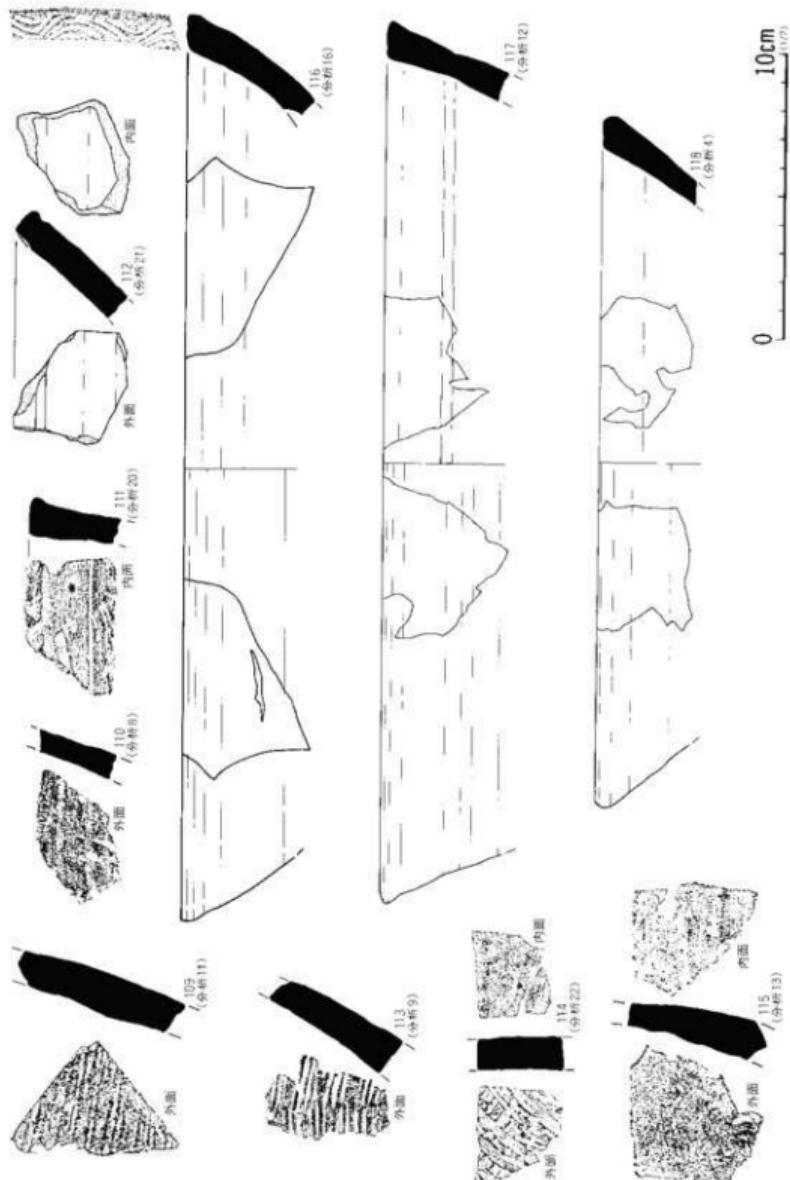
第66図 遺構外出土物



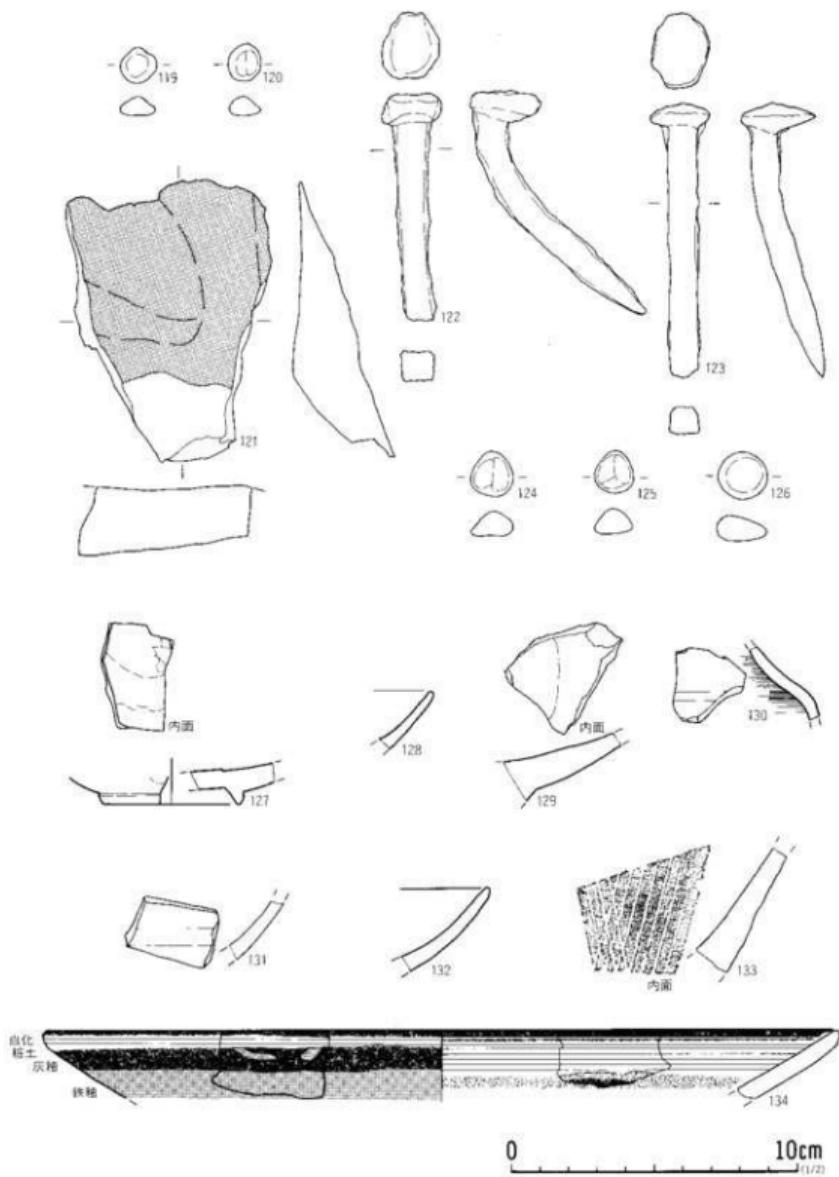
第67図 遺構外出土遺物



第68図 造構外出土遺物



第69図 遺構外出土遺物



第70図 遺構外出土遺物



第71図 遺構外出土遺物

内真部(4)遺跡出土遺物観察表

図No	遺物番号	材質 機能	種別・特徴・出土位置
38	SB02-1	V19	磁石 2面に磁が面あり 貨幣製 625.5g 覆土
38	SB02-2	VIII	基石? 黒色を呈し光沢あり 3.0g 覆土
38	SB02-3	V19	磁石 破片 2面に磁が面あり 覆土
38	SB02-4	I 1	土師器 坛 口縁部残存率7% ロクロ成形 赤色粒子・海綿骨針少量含む 覆土
38	pit 1-1	I 2	土師器 坛 口縁部破片 外面下位横ケズリ・上位横ナデ 内面横ナデと横ヘナナ子 外面焼付炭化物付着 pit 3-1と同一個体か 脱土に小隠合む 海綿骨針微量含む 覆土
38	pit 2-1	I 1	土師器 不 底部破壊率16.2% ロクロ成形 外底向回転条切痕 赤色粒子少量含む 海綿骨針多量含む 覆土
38	pit 3-1	I 2	土師器 坛 口縁部破片 外面下位横ケズリ・上位横ナデ 内面横ナデと横ヘナナ子 外面焼付炭化物付着 pit 1-1と同一個体か 脱土に小隠合む 海綿骨針微量含む 覆土
38	pit 3-2	VIII	基石? 白色を呈し光沢なし 6.3g 覆土
38	pit 4-1 (SB03)	II 3	陶器 坛 産地不明 口縁部残存率13.5% ロクロ成形 脱土中に白色の細縫多量に含む (卷頭カラー・図版参照) 覆土
39	pit 5-1	I 5	土師器皿(かわらけ) 口縁部残存率15.5% 二段ナゲ成形 上段を削る際に付いたと思われる横位沈縫状の段が外面上に一条底る 内面には墨縫状の斑点(スクリーン部)があり、灯明皿の可能性がある 赤色微粒子微量含む 12世紀中期 覆土
39	pit 5-2	I 1	土師器皿(かわらけ) 底部破片 外底面に擦痕あり 赤色と黒色の微細粒子含む 12世紀代 pit 5-1とは同一個体ではない 覆土
39	pit 6-1	I 1	土師器皿(かわらけ) 一段ナゲ成形 口縁部残存率17.5% 12世紀中期窯かや新段階と思われる 赤色と黒色の微細粒子含む 覆土
39	pit 7-1	I 1	土師器皿(かわらけ) 二段ナゲ成形 内底側に一方向のナデ 口縁部残存率15.5% 赤い細縫微粒子含む 全体的に混入物は非常に少ない やや硬質の焼成 格外産の土器表面に酷似する 12世紀中期 覆土
39	pit 8-1	I 1	土師器皿(かわらけ) 口縁部に横ナゲ成形 内面黒色処理 内底面には一方向のナデ 口縁部残存率7.3% 赤色と黒色の微細粒子微量含む 12世紀後葉 覆土
39	pit 9-1	II 3	陶器 坛 体部破片 外面ヘラガキ 内面ナゲ 外面に緑白色の自然物が若干見られるST00-1と同一個体か (卷頭カラー・図版参照) 覆土
39	pit10-1	II 6?	鏡? 真鍮? 鏡 内外鋸に鉄錆 15世紀前半 覆土
39	pit11-1	III10	釘? 銅が苦しい 13.7g 覆土
39	pit12-1	III 2 2 8?	刀子 欠損 10.9g 覆土
39	pit13-1	III10	釘? 5.5g 覆土
39	pit14-1	III10	釘? 銅が苦しい 2.9g 覆土
39	pit15-1	III 2 2 8?	刀子 破片 30.7g 覆土
39	pit16-1	III10	釘? 手ぬぐい 1.7g 覆土
39	pit16-2	VIII	基石? 緑色を呈し光沢あり 社貢石製 1.7g 覆土
40	ST02-1	I 1	土師器 坛 口縁部残存率10.4% ロクロ成形 外面に焼付炭化物わずかに付着 黒色の飛散粒子全体に含む 隠1つ含む 覆土
40	ST02-2	I 1	土師器 坛 底部残存率27.5% ロクロ成形 外底向回転条切痕 黒色の微粒子と石英多量含み、表面はざらつく 覆土
40	ST02-3	I 1	土師器 坛 口縁部残存率5.5% ロクロ成形 口唇部に沈縫状の段がめぐる 赤色微粒子微量含む 覆土

40	ST02-4	I-1	土師器 2号 口縁部残存率18.8% ロクロ成形 外底面回転？系切痕 外面風化著しい 赤色細縫合む	覆土
40	ST02-5	I-1	土師器 2号 口縁部破片 ロクロ成形 非常に薄い 内面黒色 滑縮骨針微量含む	覆土
40	ST02-6	I-2	土師器 瓢 口縁部残存率10.3% 外底面上位横ナギ→体部ケズリ 内面ヘラナギ・横ナギ 滑縮骨針微量含む	覆土
40	ST02-7	III-8	鉄瓶 基部が欠損 長鉄尖端式？ 4.0g	覆土
40	ST02-8	I-1	土師器皿(かわらけ) 口縁部破片 二段ナギ成形 勾土に混入物は非常に少なく、やや硬質の焼成 赤色細縫合む 12世紀中葉か	覆土
40	ST02-9	I-1	土師器皿(かわらけ) 二段ナギ成形 赤い細縫全体に含む 硬質の焼成	覆土
40	ST02-10	I-2	陶文土器 瓢 口縁部破片 外底面ナギ→4条の横走沈縫 内面横ミガキ・黒色斑理 赤色の鐵縫跡微量含む 烧成良好	覆土
40	ST03-1	II-3	瓦 瓦 体部破片 外向ヘラガキ 白色の自然釉が若干見られる 内面ナギ(瓦頭カツラが内参考) F=37・IIが接合 PH.9 1と同一側面か 分析5	覆土
40	ST04-1	IV-11	渡米録 大鉢 判読不可解	覆土
40	ST04-2	II-3	渡米録 壺 体部破片 外底面絞状のタタキ 内面ナギ 古風II期(13世紀前半)か 分析5 (蓋頭カラー写真参照)	覆土
40	ST04-3	III-8	鉄瓶 基部欠損 平底式 6.0g	覆土
40	ST04-4	I-9	羽口12破片 厚底が著しい 黒色の微粒子多量含む	覆土
41	ST06-1	I-1	土師器 瓢 歪詰残存率13.7% ロクロ成形 外底面回転？系切痕	覆土
41	ST06-2	I-1	土師器 瓢 口縁部残存率8.7% ロクロ成形 烧成良好 赤色縫1つ含む	覆土
41	ST06-3	VII-11	井石 瓢 鉄石英斑 濃赤褐色を呈し、にぼい光沢あり 6.0g	覆土
41	ST06-4	I-1	十筋壺 瓢 口縁部破片 ロクロ成形 風化著しい 滑縮骨針少量含む	覆土
41	ST06-5	I-1	土師器 瓢 口縁部破片 ロクロ成形 外底面状化物付着 面研骨針微量含む	覆土
41	ST06-6	I-1	土師器皿(かわらけ) 二段ナギ成形 口縁部残存率10.8% 赤色微粒子全体に含む 硬質の焼成	覆土
41	ST06-7	I-2	土師器 瓢 口縁部破片 口縁部上位横ナギ→体部ケズリ 黒色の石英多量含む	覆土
41	ST06-8	I-1	土師器皿(かわらけ) 口縁部破片 二段ナギ成形 赤色底縫全体に含む	覆土
41	ST06-9	I-1	土師器皿(かわらけ) 口縁部残存率9.3% 二段ナギ成形 断面内深灰色、外表面色でサンドイッチ状 赤色微粒子微量含む 磨滅著しい 12世紀中葉～後葉	覆土
41	ST06-10	VII-11	自然有孔石(洞石) 貝岩製 6箇所の貫通孔と2箇所の末貫通孔 28.5g 北海道青島遺跡出土のものに類似	覆土
41	ST06-11	II-3	珠洲 亞 口縁部残存率4.2% 内外面に透明な自然釉による光沢あり ロクロ成形 白色の砂粒多量含む 分析19 古風I期(12世紀後半)か (蓋頭カラー写真参照)	覆土
41	ST06-12	I-3	土師器 瓢 内向出色灰烬 頂部外面横ヘラナギ 斜面部内面横ミガキ 頂部外面横ヘクズリ→横ミガキ 剥離内面横ミガキ 底部外面横ミガキ 底部内面ミガキ 外底面ミガキ 海縮骨針全体に含む 硬質の焼成	覆土
41	ST06-13	II	青白磁 合子蓋 次板然 内面無釉で、成形痕あり 12世紀後半か	覆土
42	ST08-1	I-1	土師器 瓢 完形 ロクロ成形 外底面回転系切痕 内底面にロクロ痕 口縁部は薄く、硬質の焼成 口縫部内凹取り 赤色縫1つ含む 口径9.1cm、高径4.5cm 器高3.2cm 67.1g (蓋頭カラー写真)	覆土
42	ST09-1	II-1	青磁 瓢 刻文花 口縁部残存率8.5% 12世紀後半～13世紀初期か	複雑面
42	ST09-2	III-10	刻？ 欠損 瓢が芳しき 7.0g	覆土
42	SK01-1	I-2	土師器 瓢 口縁部破片 外底面横ナギ？ 磨滅著しい 海縮骨针少里食む	覆土
42	SK03-1	I-5	土師器皿(かわらけ) 二段ナギ成形 口縁部残存率11.6% 内外削状化物微量	覆土

			付着 赤色の小磚、白色粒子少量含む 12世紀中葉～後葉	覆土
42	SK16-1	I-1	土師器 环 底部残存率37.1% ロクロ成形 外底面凹軸系切痕 桶状が外側に2箇所、外底面に1箇所あり うち桶状-1は胎土中にあったものが剥け、器面が剝離している (夥致土器-2-弧入写真参照) 海綿骨針多量含む 赤色微粒子微量含む	覆土
42	SK16-2	I-1	土師器 环 底部残存率22.3% ロクロ成形 外底面凹軸系切痕 赤色の小縫隙多量含む 海綿骨針少量含む	覆土
42	SK16-3	I-1	土師器 环 底部残存率36.8% ロクロ成形 外底面凹軸系切痕 海綿骨針、赤色の小縫隙多量含む	覆土
42	SK16-4	I-9	羽口? 破片 磁、白色粒子、赤色粒子微量含む	覆土
42	SK16-5	I-2	土師器 瓢 口縁部破片 外面横ナデ・縫ケズリ 内面横ナデ 赤色微粒子微量含む	覆土
43	SE04-1	I-1	土師器 环 日録部残存率10.5% ロクロ成形 胎土は非常に精選されている 赤色粒子少量含む	覆土
43	SE04-2	I-1	土師器 环 日録部破片 ロクロ成形 岸誠著しい	覆土
43	SE04-3	I-1	土師器 环 底部残存率100% ロクロ成形 外底面凹軸系切痕 海綿骨針全体に多量含む 赤色微粒子微量含む	覆土
43	SE04-4	I-3	土師器2枚 口縁部は欠損している ロクロ成形 外底面静止系切痕 肩部外面に鉈齒状の沈殿文が一巡する 煙状炭化物が外外面に付着 器壁が非常に厚く、重量感がある。流成は軟質で、砂粒を含まない 底面より3～5cm浮いて出土 113.8g(春頭カラー・回収番号)	覆土
43	SE04-5	I-2	壇文土器壺 体部上位破片 外面縦割と横位のハケメー斜格子沈線 内面上位縦ミガキ 色調は外外面とも黒褐色 海綿骨針微量含む 白色微細繊全体に多量含む	覆土
43	SE04-6	I-2	壇文土器壺 体部破片 外面縦位ハケメー 内外面摩擦感しい 小縫隙微量含む 小縫隙多量含む	覆土
43	SE04-7	I-II-3	須恵器または土師器 瓢 底部残存率 分析21	覆土
43	SE04-8	I-II-1	須恵器または土師器 瓢 底部残存率21.0% ロクロ成形 外底面凹軸系切痕 海綿骨針少量含む 分析3	覆土
43	SE04-9	I-3	土師器 瓢 腹部破片 内面黒色処理 腹部外面へラケズリとヘラナデ・横ミガキ 腹部内面横ミガキ ST06-12と同一個体か 海綿骨針全体に含む	覆土
44	SE04-10	V10	井戸棒材? 6面の面取り 角型の滑穴	覆土下位
44	SE04-11	V-	不明 構造形の孔と釘穴1つあり	覆土
44	SE04-12	V10	井戸棒の部材? (杭状) 内部が腐食し、空洞になる	覆土
44	SE04-13	V-	不明 炭化部分あり	覆土
44	SE04-14	V-	井戸棒の部材? (板状)	覆土
44	SE04-15	V-	不明 炭化部分あり	覆土
45	SE04-16	V-	不明 3か所に釘穴	覆土
45	SE04-17	V1-	砾石? 白岩質 水に溶けやすく軟質 黒色の付着物あり 880g	覆土
45	SE04-18	V-	不明 人物による2か所の深い抉れあり	覆土
45	SE04-19	V10	井戸棒の部材? (板状) 炭化部分あり 上部は掏穴の一部	覆土
46	SE05-1	II-2	珠系 磁針 日録部残存率4% 吉岡IV期後半(14世紀後半) 分析17(春頭カラー・写真参照)	覆土
46	SE05-2	V19	砾石 欠損 砥ぎ面は8面 ターナー状の物質が欠損部と砥ぎ面に付着 露天均質直井型 441.8g	覆土
46	SE05-3	IV11	渡米鏡 判読不可能	覆土
46	SE05-4	IV11	渡米鏡(宋) 壶宋通宝 1039年初鋤 露食者しい	覆土

46	SE05- 5	VIII	自然隕 煤状炭化物?付着 100.7g	覆土
47	SE06- 1	VII	下駄 連山型 麻績の孔3箇所 南は磨り減り、裏面の押部分まで磨り減る 母指と母指丘部分が重む 165.9g	覆土
47	SE06- 2	VII	下駄 連山型 吊緒の孔3箇所 母指と母指丘部分が重む 216.1g	覆土
48	SE06- 3	V I	箸 宽形 対物による傷あり	覆土
48	SE06- 11	V I	箸 折れ二箇所	覆土
48	SE06- 15	V I	箸 欠損 欠損部炭化	覆土
48	SE06- 16	V I	箸 欠損 折れ一箇所 末端炭化	覆土
48	SE06- 19	V I	箸 欠損 末端炭化	覆土
49	SE06- 31	V I	箸 欠損 末端炭化	覆土
49	SE06- 39	V I	箸 欠損 欠損部炭化	覆土
50	SE06- 71	V -	部材? (棒状)	覆土
50	SE06- 73	V -	扇の一側か 斧巾の一側か 孔1箇所	覆土
50	SE06- 76	V -	部材? (板状)	覆土
50	SE06- 77	VI	敲き石 磨き面 滑灰岩製 40.6g	覆土
50	SE06- 78	V -	部材? 欠損 (棒状)	覆土
50	SE06- 79	V -	部材の破片?	覆土
50	SE06- 80	V -	部材? (棒状)	覆土
51	SE06- 81	V 2	白在鉢の一添か 紐通し? の孔あり 下半の一部が炭化 43.3g	覆土
51	SE07- 1	II 1	土師器 环 口縁部残存率9.6% ロクロ成形 赤色粒子少量含む	覆土
51	SE07- 2	II 1	土師器 环 11縁部破片 ロクロ成形 赤色粒子微量含む	覆土
51	SE07- 3	II 2	土師器 环 口縁部残存率7.9% 外面横ナメ・ケズリ 内面ナメ 外面炭化物多 量付着 赤色微粒子微量含む	覆土
51	SE07- 4	II 2	擦文土器壺 脱部破片 外面ハケメ 内面ミガキ→黒色処理 赤色粒子微量含む 黒色斑多量含む	覆土
51	SE07- 5	II 2	擦文土器壺 13縁部残存率7.4% 外面ハケメ→横ナメ 3条の横走沈線 3段目 の横走沈線の上位はハケメのみ 内面横ミガキと1条の浅い横走沈線 黒色施錆 多量含む 海綿骨針多量含む	覆土
52	SE08- 1	II 2	耳皿? 越前? 無鉢 11縁部欠失 底部残存率100% ロクロ成形 内面10条+1単位 の御目が8条 御目を施す順序は → + × 明透～明透褐色の混成 外面保炭 化物付着 分析25 (巻頭カラー写真参照)	覆土
52	SE08- 2	II 2	珠洲 握鉢 体部破片 内面御目 分析23 (巻頭カラー写真参照)	覆土
53	SE08- 3	II 2	珠洲 握鉢 口縁部破片 口縁部残存率6.8% 外面黒斑 内面剥落著しい 吉岡 IV期中業へ後業(14世紀中葉～後業) 分析18 (巻頭カラー写真参照)	覆土
53	SE08- 4	VI 9	砥石 欠損 磨ぎ面2面 炭化物付着 7.2g	覆土
53	SE08- 5	VI 9	砥石 欠損 磨ぎ面1面 滑灰岩製 SE08- 7と接合 煤状の炭化物なし 39.8g	覆土
53	SE08- 6	VI 9	砥石 欠損 磨ぎ面2面 19.4g	覆土
53	SE08- 7	VI 9	砥石 欠損 煤状の炭化物が付着 磨ぎ面は3回滑灰岩製 1610g (+ SE08- 5 + 1649.8g)	覆土
54	SE09- 1	II 3	珠洲壺(B種) 体部破片 外面ヘラガキ 吉岡IV期(11世紀)以前 分析2	覆土
54	SE09- 2	III 2 ? 8 ?	刀子? 欠損? 19.8g	覆土
54	SE09- 3	III 2 ? 8 ?	刀子? 24.3g	覆土
54	SE09- 4	III 2 ? 8 ?	刀子? 30.9g	覆土
54	SE09- 5	V -	大板? 烟四隅に円孔 片面のみに刃物傷見られる	覆土
54	SE09- 6	V -	天板? 烟四隅に円孔 片面のみに刃物傷見られる	覆土
54	SE09- 7	V	部材? (板状) 一部炭化	覆土
54	SE09- 8	V 3	曲物 倒板破片 内面縫の刻み	覆土

54	SE09-9	V 3	曲物 円板 欠損	覆土
55	SE09-10	V 1	著 完形 末端炭化	覆土
55	SE09-11	V 1	著 末端炭化	覆土
55	SE09-16	V 1	著 欠損部炭化	覆土
55	SE09-24	V 1	著 欠損部炭化	覆土
55	SE09-31	V 1	著 欠損部炭化	覆土
55	SE09-33	V 1	著 末端炭化	覆土
56	SE09-64	V -	部材? 破片 断取り 2面?	覆土
56	SE09-65	V -	井戸作の部材? (棒状)	覆土
56	SE09-66	V -	部材(板状) 部分的に炭化する	覆土
56	SE09-67	V -	部材(棒状) 部分的に炭化する	覆土
56	SE09-68	V -	不明 高温欠損 断取り 4面	覆土
56	SE09-69	V -	部材 断取り 7面	覆土
57	SE09-70	V -	部材(板状) 末端が炭化する	覆土
57	SE09-71	V -	部材(板状) 部分的に炭化する	覆土
57	SE09-80	V -	木筋? 断取り 4面	覆土
57	SE09-81	V	木筋?	覆土
57	SE09-82	V 3	曲物円板	覆土
58	SE09-86	V19	砥石 欠損 部分的に煤状の炭化物が付着 非常に硬質 磨粒凝灰岩製 852.9g 砥ぎ面は4面 欠損部は、素材を取る際のものか	覆土
58	SE09-88	V19	砥石? 非常に致密で水に溶けやすい 真岩製 391.9g	覆土
58	SE09-88	V19	砥石? 部分的に煤状の炭化物が付着 非常に致密で水に溶けやすい 真岩製 238.4g	覆土
58	SE09-89	V19	砥石 欠損 砥ぎ面2面 流紋岩製 211.2g	覆土
58	SE09-90	V19	砥石 完形 非常に硬質 砥ぎ面4面 磨灰岩質真岩製 771.8g	覆土
59	SE11-1	I 2	上部器皿 納 口縁部破片 外面下位横ケズリ→ト位横ナデ(粘土質底あり) 内底 ヘラナデオナデ 面錐骨釘少量含む	覆土
59	SE11-2	I 1	土師器皿 手 瓦底残存率31.0% 摧滅著しい 外底向回転? 条切痕 面錐骨釘微量含む	覆土
59	SE11-3	V19	砥石? 砥ぎ面は1面か 欠損部に煤状炭化物付着 非常に致密で水に溶けやすい 真岩製 137.9g	覆土
59	SE11-4	VII1	咎石? 黒色で光沢あり 真岩製 3.2g	覆土
59	SD01-1	II 3	須恵器 串 体部破片 外側タタキ口 五所川原窯か 分析6	覆土
59	SD02-1	II 2	珠済 錠鉢 口縁部破片 傷痕が著しい 吉備IV期(14世紀) 分析14	覆土
59	SD03-1	I 9	羽口! 先端部破片 外面には黒いガラス状の物質が接着 孔に近い部分の断面は赤色を呈す	覆土
59	SD03-2	II 1	瀬戸美濃? 瓢? 内外面灰釉 体部破片	覆土
60	SX02-1	I 5	上部器皿(かわらけ) 口縁部残存率7.0% 一段ナデ成形 内面に炭化物微量付着 赤色小球微量含む 2片が接合 12世紀中葉~後葉	確認面
60	SX02-2	I 1	土師器皿(かわらけ) 口縁部残存率9.9% 一段ナデ成形 赤色小球少量含む 12世紀後葉	確認面
60	SX02-3	I 1	土師器皿(かわらけ) 口縁部残存率10.6% 二段ナデ成形 赤色粒子微量含む	底面
60	SX02-4	I 5	上部器皿(かわらけ) 口縁部残存率61.1% 二段ナデ成形 型を用いている可能性あり 内面には煤状炭化物と準圓錐状の難点が付着 赤色小球少量含む 62.4g	確認面と底面が複合
60	SX02-5	I 1	上部器皿(かわらけ) 底部破片 内底圓内形ナデ 一方向のナデは觀察されない 外底面ハゲメ状の擦痕 赤色粒子少量含む	底面

60	SX02-6	1.5	上部器皿(かわらけ) 水溶破片 内底面円形ナメと一方向のナメ 内面に特徴量の 炭化物付着 赤色小穂含む	覆土
61	遺構外-1	1.1	上部器皿 环 口縁部残存率9.9% ロクロ成形	トレンチ
61	遺構外-2	1.1	土師器 环 口縁部残存率2.8% ロクロ成形 赤色粒子微量含む	F-36・II
61	遺構外-3	1.1	土師器 环 口縁部残存率5.5% ロクロ成形 海面骨針全体に含む 赤色粒子微 量含む	F-23・II
61	遺構外-4	1.1	土師器 环 口縁部残存率13.6% ロクロ成形 海面骨針全体に含む 赤色粒子微 量含む	トレンチ
61	遺構外-5	1.1	土師器 环 口縁部残存率11.3% ロクロ成形 海面骨針全体に含む	F-37・II
61	遺構外-6	1.1	土師器 环 口縁部残存率11.7% ロクロ成形 内面に塊状の炭化物が付着	トレンチ
61	遺構外-7	1.1	土師器 环 口縁部残存率13.0% 尾部残存率100% ロクロ成形 外底面回転系 切痕 海面骨針多量に含む	F-37・II
61	遺構外-8	1.1	土師器 环 口縁部残存率9.2% 尾部残存率100% ロクロ成形 外底面回転系 切痕 口縁部は壊滅している可能性がある。	トレンチ
62	遺構外-9	1.1	土師器 环 底部残存率29.3% ロクロ成形 同上?系切痕 海面骨針微量含む 赤色小穂含む	F-37・II
62	遺構外-10	1.1	土師器 环 底部残存率100% ロクロ成形 同上系切痕 赤色小穂微量含む 海 面骨針微量に含む	F-23・II
62	遺構外-11	1.1	土師器 环 底部残存率58.5% ロクロ成形 外底面回転系切痕 内面白色へ 機 会 外面薄紅色の塊成 海面骨針含む	F-37・II
62	遺構外-12	1.1	土師器 环 底部残存率36.5% ロクロ成形 外底面静止?系切痕 内面成形底 部 含 赤色粒子微量含む 砂土積還される	トレンチ
62	遺構外-13	1.1	土師器 环 底部残存率38.8% ロクロ成形 外底面回転系切痕 海面骨針多量 に含む 赤色小穂少量含む	トレンチ
62	遺構外-14	1.1	土師器 环 底部残存率49.0% ロクロ成形 外底面回転系切痕 赤色小穂少量 含む 海面骨針?微量含む	トレンチ
62	遺構外-15	1.1	土師器 环 底部残存率48.9% ロクロ成形 外底面回転系切痕 外底面黒色を 呈す 治子は積還される	G-23・II
62	遺構外-16	1.1	土師器 环 底部残存率34.3% ロクロ成形 外底面回転?系切痕 黒色 小穂多量含む 砂質の塊成	H-38・II最下
63	遺構外-17	1.1	土師器 环 底部残存率18.2% ロクロ成形 外底面静止系切痕 赤色小穂含む	G-35・II
63	遺構外-18	1.1	土師器 环 底部残存率35.0% ロクロ成形 外底面回転系切痕 内面黑色處理 赤色小穂含む 底部中央は非常に弱がが薄い	H-38・II最下
63	遺構外-19	1.1	土師器 环 底部残存率100% ロクロ成形 外底面回転系切痕 海面骨針少量含 む 霧壁薄い	F-37・II
63	遺構外-20	1.1	土師器 环 底部残存率11.7% ロクロ成形 外底面回転系切痕 赤色小穂全体 に含む 海面骨針多量含む	F-35・II最下
63	遺構外-21	1.1	土師器 环 底部残存率43.9% ロクロ成形 外底面回転系切痕 赤色小穂全体 に含む	トレンチ
63	遺構外-22	1.1	土師器 环 底部残存率32.4% ロクロ成形 外底面回転系切痕 赤色小穂多量 含む 黑色砂質全体に含む	トレンチ
63	遺構外-23	1.1	土師器 环 口縁部破片 ロクロ成形 海面骨針少量含む	トレンチ
63	遺構外-24	1.1	土師器 环 口縁部破片 ロクロ成形 器壁厚い	トレンチ
63	遺構外-25	1.1	土師器 环 口縁部破片 ロクロ成形 内面に棱を持つ	トレンチ
63	遺構外-26	1.1	土師器 环 口縁部破片 ロクロ成形 赤色小穂含む 施土精製 硬質の塊成	G-23・II

63	遺構外-27	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 器壁厚い	トレンチ
63	遺構外-28	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 25と同一個体か	トレンチ
63	遺構外-29	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 硬質の焼成	トレンチ
63	遺構外-30	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 胸面骨針少量含む	トレンチ
63	遺構外-31	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 脱胎模造	トレンチ
63	遺構外-32	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 赤色小線微量含む	F-37・II
63	遺構外-33	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 海面骨針微量含む	トレンチ
63	遺構外-34	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 胸面骨針微量含む	トレンチ
63	遺構外-35	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 加曲部あり 海面骨針少量含む	トレンチ
63	遺構外-36	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 胸面骨針多量含む	トレンチ
63	遺構外-37	1.1	土師器 环	口縁部破片	クロコ成形 G-37・II最下	
64	遺構外-38	1.2	土師器 裂	口縁部残存率17.4%	外面上位横ナデ→ト位縫へラケズリ 口縁部内向上位横ナデ 硬合な 粘膜薄い 海面骨針全体に含む 内外面埋状炭化物付着	F-36・II
64	遺構外-39	1.2	土師器 緊	口縁部残存率10.9%	外面上位横ナデ→下位縫へラケズリ 11胸部11玉6粒状に肥厚する 内面ヘラナデ 砂粒多量含む	G-38・II
64	遺構外-40	1.2	土師器 緊	口縁部残存率10.0%	口縁部外面上位横ナデ→下位ヘラケズリ 口縁部内面横ナデ 硬成長良好 海面骨針微量含む 赤色小線微量含む F-35・II最下	
64	遺構外-41	1.2	土師器 裂	口縁部残存率22.0%	口縁部外向下位ヘラケズリ 砂粒多量含む 胸面骨針微量含む F-37・II	
64	遺構外-42	1.2	土師器 裂	口縁部残存率9.5%	外向上位横ナデ・ト位縫へラケズリ 内面ナデ硬質の焼成 赤色微粒子全体に含む	トレンチ
64	遺構外-43	1.2	土師器 裂	口縁部残存率12.2%	口縁部外向下位縫へラケズリ 口縁部内面横ナデ 硬質の焼成 赤色微粒子微量含む F-39・II	
64	遺構外-44	1.2	土師器 把手付	把手部破片	外面上位横ナデ 内空 赤色微粒子微量含む 砂粒多量含む F-32・II	
65	遺構外-45	1.2	土師器 把手付?	外面上位横ナデ 内面粘土積痕 外底向スダレ状の圧痕 口縁部破片と底部破片を図上で合成している 赤色微粒子含む	トレンチ	
65	遺構外-46	1.2	土師器 裂	底部残存率100%	外面上位横ナデ 外底向スダレ状の圧痕 白色小線全体に含む	トレンチ
65	遺構外-47	1.2	土師器 裂	底部残存率20.0%	外面上位横ナデ 外底向スダレ状の圧痕 压痕著しい F-30・II	
65	遺構外-48	1.2	土師器 磁?	底部残存率100%	外面上位横ナデ→縁ミガキ 内底向ヘラミガキ 上指先痕 外底向一部ミガキ 外面に黄色粘土が部分的に付着 小線含む 胸面骨針微量含む F-37・II	
65	遺構外-49	1.2	土師器 磁	口縁部外面横ミガキ	外面上位横ナデ 内面横ヘラナデ 胸面骨針微量含む 赤色微粒子微量含む トレンチ	
65	遺構外-50	1.2	土師器 裂	口縁部破片	外面上位横ナデ・ト位縫へラケズリ 内面横ナデ トレンチ	
65	遺構外-51	1.2	土師器 磁	口縁部破片	砂粒多量含む 内外面横ナデ G-38・II	
65	遺構外-52	1.2	土師器 裂	口縁部破片	外向上位横ナデ・ト位縫へラケズリ 压痕著しい 赤色微粒子微量含む 海面骨針微量含む トレンチ	
65	遺構外-53	1.2	土師器 裂	口縁部破片	41と同一個体か F-37・II	
65	遺構外-54	1.2	土師器 裂	口縁部破片	摩滅著しい 胸面骨針全体に含む 赤色小線微量含む II-38・II	
65	遺構外-55	1.2	土師器 磁	口縁部破片	摩滅著しい 砂粒多量含む II-33・II	
65	遺構外-56	1.2	土師器 磁	口縁部破片	外面上位横ナデ 胸面骨針全体に含む 赤色小線微量含む II-26・II	

65	遺構外-57	I 2	上部器 壺 口縁部破片 内外面横ナデ	トレンチ
65	遺構外-58	I 2	土壌器 壺 口縁部破片 砂粒多量含む	F-37・II地下
65	遺構外-59	I 2	上部器 壺 口縁部破片 内外面上位横ナデ 下位ヘラケズリ 砂粒含む	トレンチ
65	遺構外-60	I 2	上部器 壺 口縁部破片 外面上位横ナデ 下位ヘラケズリ 内面横ナデ 硬質の 焼成	トレンチ
65	遺構外-61	I 2	上部器 壺 口縁部破片 外面上位横ナデ 外面下位に縦ヘラケズリを施し、口縁 部を肥厚させる 口唇部には横位沈線が巡る 二次被熱により硬化	表面採集
65	遺構外-62	I 2	裏 体部破片 外面タタキ目	F-22・II
65	遺構外-63	I ~ II 1	上部器または復元器 瓶 底部残存率24% ロクロ成形 外底面回転系切削 滑面 骨付合む 赤色小穂は紫色に変質	F-34・II
66	遺構外-64	I 2	擦文土器 壺 口縁部破片 外面上位横ミガキ→下位麻ミガキ 内面上位横ヘラナ デ 下位麻ミガキ 焼成良好 赤色微粒子微量含む 海向骨針微量含む	F-36・II
66	遺構外-65	I 2	擦文土器 壺 内面上位横ミガキ→下位横ヘラミガキ 黒色処理 石英細粒多量含 む 赤色微粒子微量含む 口縁部破片 外面5条の横走沈線 1段目と5段目の 沈線の中に刺突	トレンチ
66	遺構外-66	I 2	擦文土器 壺 口縁部附近破片 外面4条の横走沈線 4段目の沈線の中に刺突 遺構外-65と同一個体か	トレンチ
66	遺構外-67	I 2	擦文土器 壺 体部破片 一条の貼付側縫合 その上面には馬蹄形の押捺文 内面 ミガキ 小穂多量含む 麻織含む	トレンチ
66	遺構外-68	I 2	擦文土器 壺 体部破片 一条の貼付側縫合 内面縦ミガキ	トレンチ
66	遺構外-69	I 2	擦文土器 壺 体部破片 一条の貼付側縫合 その上位には沈線文 麻織含む 黒色粒子多量含む	トレンチ
66	遺構外-70	I 2	擦文土器 壺 口縁部附近破片 外面2条の横走沈線 斜位の刺目 黒色微粒子 多量含む	トレンチ
66	遺構外-71	I 2	擦文土器 壺 体部破片 外面2条の横走沈線とそれらの上位には連続山型文 四 角右美全体に含む 内面ミガキ	G-24・II
66	遺構外-72	I 2	擦文土器 壺 体部破片 外面2条の横走沈線 海西骨針微量含む	F-40・II
66	遺構外-73	I 2	擦文土器 壺 体部破片 外面沈線による連続山型文 内面ミガキ 黑色処理 赤 色小穂含む	トレンチ
66	遺構外-74	I 2	擦文土器 壺 体部破片 外面2条の窪位沈線と5条の斜位沈線 赤色小穂微量 含む 黑色微粒子全体に含む	F-22・II
66	遺構外-75	I 2	擦文土器 壺 体部破片 外面ハケメ+沈線 内面ミガキ 小穂多量含む	F-36・II
66	遺構外-76	I 2	擦文土器 壺 体部破片 外面横位のハケメ+沈線 内面ミガキ 黑色小穂多量含 む	F-37・II
66	遺構外-77	I 2	擦文土器 壺 体部破片 外面横位のミガキ 内面縦ミガキ 内外面、断面とも黒 色 白色小穂少量含む	H-35・II
66	遺構外-78	I 2	擦文土器 壺 体部破片 外面窪位のハケメ 内面縦ミガキ 内面炭化物多量付着 内面黒色処理	トレンチ
66	遺構外-79	I 2	文器 脚部破片 外面ヘラケズリ 底面一条の沈線 赤色小穂微量含む 孔は四角 形	トレンチ
66	遺構外-80	I 2	文器 脚部破片 外面ヘラケズリ 孔は円形 赤色小穂微量含む 小穂全体に含む	トレンチ
66	遺構外-81	I 2	文器 脚部破片 外面ヘラケズリ 孔は円形 外面には経黄褐色の粉土が付着 小穂含む	トレンチ
66	遺構外-82	I 2	文器 脚部破片 外面無調整? 底面一条の沈線 孔は円形 黑色細粒多量含む	トレンチ

				F 43 • II
66	遺構外-83	I 2	支脚 制部 外向ヘラケズリ 81と同一個体か	II-35・II最下
66	遺構外-84	I 9	羽口 破片 口縁部斜削?全体に含む 赤色小織微量含む	
67	遺構外-85	I 1	上輪器皿(かわらけ) 口縁部残存率11.5% 二段ナデ成形 摩滅著しい 赤色粒子全体に含む	トレンチ
67	遺構外-86	I 1	上輪器皿(かわらけ) 口縁部破片 二段ナデ成形 内面單色処理 赤色粒子全体に含む	F-42 • II
67	遺構外-87	I 1	上輪器皿(かわらけ) 口縁部残存率6.0% 二段ナデ成形 赤色粒子微量含む	F-41 • II
67	遺構外-88	I 1	上輪器皿(かわらけ) 二段ナデ成形 赤色小粒子微量含む	トレンチ
67	遺構外-89	I 1	土師器皿(かわらけ) 口縁部残存率20.0% 二段ナデ成形 ナデの上に擦痕あり	
				トレンチ
67	遺構外-90	II 1	白磁 盆 口縁部残存率6.6% 12世紀後半~13世紀前半か (山遺削溝部分招乱)	
67	遺構外-91	II 1	青磁 瓢 口縁部残存率4.7% 14世紀後半~15世紀前半か	F-32 • II
67	遺構外-92	II 1	青磁 瓢 口縁部残存率6.1% 14世紀後半~15世紀前半か	F-32 • II
67	遺構外-93	II 1	青磁 瓢 口縁部残存率5.7% 14世紀後半~15世紀前半か	F-22 • II
67	遺構外-94	II 1	青磁 盆 口縁部残存率9.3% 14世紀代か	G-30 • II
67	遺構外-95	II 1	青磁 瓢 割花文 口縁部破片 12世紀中葉~後半か	G 24 • II
67	遺構外-96	II 1	青磁 瓢 体部破片 14世紀後半~15世紀前半か	F-32 • II
67	遺構外-97	II 1	青磁 瓢 体部破片 14世紀後半~15世紀前半か	F 38 • II
67	遺構外-98	II 1	瀬戸美濃 平碗 口縁部破片 内外面灰釉 15世紀前半か	G-30 • II
67	遺構外-99	II	瀬戸美濃 盆底付近体部破片 内外面灰釉 外面無釉 寄合跡か	H-26 • II
67	遺構外-100	II 6 ?	瀬戸美濃 天目碗 体部破片 内外面灰釉	G 35 • II
67	遺構外-101	II 6 ?	瀬戸美濃 天目碗 体部破片 内外面灰釉 外向下位寄合部露胎	G-36 • II
67	遺構外-102	II 3	陶器 壺 ?座地、時刻不明 体部破片 内外面灰釉 外面は暗赤褐色	トレンチ
67	遺構外-103	IV 11	萩窯 茶托著しく摩耗し判読不可能 開元調上か	H 35 • II
67	遺構外-104	IV 11	萩窯 茶托著しく摩耗し判読不可能 開元通宝か	F-29 • II
67	遺構外-105	IV 11	萩窯 茶托著しく摩耗し判読不可能 一次被熱	表面探集
68	遺構外-106	II 2	珠洲 霧跡 体部断片(上部) 分析7	F 31 • II
68	遺構外-107	II 2	珠洲 霧跡 全部破片? 内面削し目が交差する 分析10	H23 • II
68	遺構外-108	II 2	珠洲 霧跡 片口型 口縁部~底部付近破片 口縁部残存率31.3% 内面9?	
			条一単位の剥し目 片口部下位に粘土層付着 古岡IV期(14世紀) 分析1	
				G-35 • II
69	遺構外-109	II 3	珠洲 壺 体部破片 分析11	F-34 • II最下
69	遺構外-110	II 2	珠洲 霧跡 体部断片 分析8	F 23 • II F 35 • II
69	遺構外-111	II 2	珠洲 霧跡 口縁部破片 内面に1条の沈線状の傷 分析20	H-26 • II
69	遺構外-112	II 2	珠洲 霧跡 口縁部破片 分析21	F-34 • II
69	遺構外-113	II 2	珠洲 壺 体部破片 外面タキキ 吉岡IV期(14世紀) 分析9	F 35 • II
69	遺構外-114	II 3	珠洲 壺 体部破片 外面ヘラガキ 内面ナデ 分析22	H-24 • II
69	遺構外-115	II 3	珠洲 壺 体部破片 内外面ナデ 分析13	F-42 • II
69	遺構外-116	II 2	珠洲 霧跡 口縁部残存率5.9% 口唇部に波状の櫛状文 吉岡IV期末葉(14世紀末葉) 分析16	F-32 • II
69	遺構外-117	II 2	珠洲 霧跡 口縁部残存率4.6% 吉岡IV期後半(14世紀後半) 分析12 トレンチ	
69	遺構外-118	II 2	珠洲 霧跡 口縁部残存率5.9% 分析4	F 35 • II最下
70	遺構外-119	VII 11	基石? 黄白色 光沢あり 1.5g	G-30 • II
70	遺構外-120	VII 11	基石? 橙色 光沢あり 1.3g	G 30 • II
70	遺構外-121	VII 9	砾石 欠損 斜ぎ向1面 斜底凸起 マーブリング状に赤と白が入り混じった色調を呈する 福井県常滑市守屋	

70	造橋外-122	III 10	釘 直曲する	F - 36 + II
70	造橋外-123	III 10	釘 若干彎曲する	H - 35 + II
70	造橋外-124	VII 11	甚右? 片面白色と黄色 片面黒色 光沢あり 2.6g	H - 26 + II
70	造橋外-125	VII 11	甚右? 半透明部と白色部が入り混じる 光沢あり 2.3g	H - 26 + II
70	造橋外-126	VII 11	甚右? 黄白色 光沢あり 3.3g	G - 39 + II
70	造橋外-127	II 1	肥前 磁器皿 内面蛇ノ目釉剥ぎ 外面無釉 大柄IV期	F - 37 + II
70	造橋外-128	II 1	肥前 磁器皿 口縁部破片 大柄IV期か	F - 32 + II
70	造橋外-129	II 1	肥前 磁器皿 内面蛇ノ目釉剥ぎ 大柄IV期	G - 34 + II
70	造橋外-130	II 11	肥前 磁器皿 白磁魚 肩部破片 外面透明釉 内面無釉 時期不明	H - 23 + II
70	造橋外-131	II -	陶器 底地、切削、器形不明 体部破片 内外面灰釉	H - 26 + II
70	造橋外-132	II 1	肥前 磁器 青磁皿 口縁部破片 大柄IV期	G - 34 + II
70	造橋外-133	II 2	肥前 磁器(唐津) 磁器 内外面無釉 内面調く深い印し口 大柄III期か	G - 35 + II
70	造橋外-134	II 1	肥前 陶器(唐津)大皿 内面鉄釉、灰釉・白化粧土による刷毛口→灰釉→透明釉 外面鉄釉・灰釉→白陶釉→透明釉 入模IV期か	
71	造橋外-135	II 1	肥前 磁器皿 口縁部破片 染付 二重圓線 大柄IV期か	H - 26 + II
71	造橋外-136	II 1	肥前 磁器皿 口縁部破片 染付 大柄IV期か	H - 24 + II
71	造橋外-137	II 1	肥前 磁器皿 口縁部破片 染付 外面梅花文 大柄IV期	H - 24 + II
71	造橋外-138	II 1	磁器 旗 王旗部破片 内外面コバルト染付 明治以降	H - 23 + II
71	造橋外-139	II 1	肥前 磁器皿 体部破片 染付 外面梅花文 大柄III期	F - 32 + II
71	造橋外-140	II 1	肥前 磁器皿 体部破片 染付 外面一重圓線 大柄III期	F - 34 + II
71	造橋外-141	II 1	肥前 磁器皿 体部破片 染付 大柄IV期	F - 32 + II
71	造橋外-142	II 1	肥前 磁器皿 体部破片 染付 大柄IV期	H - 26 + II
71	造橋外-143	II 1	肥前 磁器皿 体部破片 染付 内外面一重圓口文 大柄III期か	G - 34 + II
71	造橋外-144	II 1	庄地不明磁器 小杯 見込金による彩色 斜面部分の曲線は染付 記念杯	H - 26 + II
71	造橋外-145	II 1	肥前 磁器皿 底部付近破片 染付 コンニャク印判 大柄IV期	井上
71	造橋外-146	II 1	肥前 磁器皿 染付 外面二重圓線 大柄IV期	G - 34 + II
71	造橋外-147	II 1	肥前 磁器皿 口縁部破片 染付 内面梅花文 大柄III期	F - 43 + II
71	造橋外-148	II 1	肥前 磁器皿 体部破片 染付 内面梅花文 大柄IV期	F - 40 + II
71	造橋外-149	II 1	肥前 磁器皿 染付 内面 重圓線と墨跡 外面三重圓線入模IV期	F - 40 + II
71	造橋外-150	II 1	肥前 磁器皿 体部破片 染付 内面二重圓線と梅花文 大柄II - 2期?	H - 24 + II
71	造橋外-151	II 1	肥前 磁器皿 底部破片 染付 内面 重圓線 大柄IV期	G - 26 + II
71	造橋外-152	II 1	肥前 磁器皿 口縁部破片 染付 大柄IV期	F - 34 + II
71	造橋外-153	II 1	磁器 皿 11號部～底部破片 刷毛口によるコバルト染付 内面同化した紙竹 梅文 明治以降	G - 35 + II
71	造橋外-154	II 1	肥前 磁器皿 内外面透明釉 内面蛇ノ目釉剥ぎ 大柄IV期	F - 36 + II

(木村 24)

第VII章 分析と考察

第1節 遺跡の立地・検出遺構について

(立 地)

第III章第3節でも述べたが、本遺跡周辺は、農林水産業を営む上からも生活には適した場所であると言える。そのことは多くの遺跡の分布からもわかる。

今回の調査の結果、本遺跡は、平安時代～中世にかけての集落・城館跡の一部である可能性が高まった。第5図にあるように、本遺跡の周辺には、かなりの遺跡や比較的多くの城館跡が所在する。そこで、まず、本遺跡と周辺の遺跡との関連について述べていくことにする。

城館の「占地」に関して、岩本義雄氏は、「(前略)平常時に、山麓より約150mの陥しい山城(尻八館)で生活したとは考え難く、(略)…では、軍事的要塞である山城と平常の居館はどの程度の距離を隔てることが許容されたのであろう。」と問題提起をし、「(尻八館の)北東約5.5km、標高15～20mの低平な台地に位置する蓬田大館および南東約3km、標高93mの台地に占地した内真部城跡と関係を考慮すべきかもしれない。」と示唆している。このことに関連して、内真部館と本遺跡の関連もまた問題となるものと考える。内真部館は、本遺跡の北西0.5kmと距離的に近い位置に所在している。とは言うものの、踏査がなされたのみであり、「諏訪縁起絵詞」にある内摩部館がこの内真部館を指すものかも具体的に立証できないのが現状である。また、本遺跡についてもごく限られた一部の調査である。そのため、本遺跡が立地する丘陵全体が一つの集落・城館を形成するのか、遺跡を囲むかのように走る水路の性格把握等、遺跡の全容をつかむには至っていない。残念ながら、遺跡間の関連を論じるにはあまりにも無理があり、今後の課題となる。

次に、本遺跡および各城館の陸海の交通の面からみた立地条件を述べる。(第5図参照)

1 陸のルートとしては、次の道が考えられる。

①奥州街道の終点としての油川から更に延びる、陸奥湾沿い(旧松前街道)や丘陵東縁を南北に走る道。②中山山脈を東西に横断し、津軽平野北部(十三ヶ)に通じる道。(1)尻八館からの道(間道)。(2)本遺跡や内真部館から内真部川に遡り金木町に至る道。(3)蟹田町山本館から小国岬を越えて今別や三厩に至る道および中里町に至る道。(4)油川城から五所川原市飯詰に至る道。

2 河川、海の水運を利用したルートとしては、次の道が考えられる。

①中山山脈から東流する小河川の水運を利用したルート。(2)油川港や後潟港等を拠点とした、陸奥湾沿岸に展開する日本海交易へつながる海のルート。

以上のことから、いずれの遺跡も外ヶ浜と津軽平野北部（十三湊）を結ぶ陸海の交通の要衝に位置している。このことは、当時の経済や流通機構、領主の領国支配のあり方等を考える上で重要なキーとなりうる。当該地方における古代・中世史を解明する上からも、本遺跡ならびに周辺の城館跡、中山山脈の西側（北津軽郡側）についても本格的な発掘調査が望まれる。

〔検出遺構〕

1 S T 穫穴建物跡

検出された竪穴建物跡は10軒である。この種の遺構については、竪穴遺構、竪穴住居跡、竪穴建物跡等の名称が与えられている。本報告書では『竪穴建物跡』と称することにしたい。

〔分類〕

I：かまどを構築せず、かつ全体の構造がほぼ把握できるもの（第3、4、9号）

明らかに上屋構造を持つものである。第4号は、壁際に8個の主柱穴が配置されており、床面に灰ビットを伴う。更に、南側に張り出しの出入口をもつものと思われる。第3、9号は壁より40～50cmほど内側に6個の主柱穴が配置されている。張出しじゃない。第3号は床面に2条の、第9号は1条の溝を伴う。これらの溝は建物内の仕切りとしての用途等が考えられる。

II：かまどらしきものがあり、竪穴住居跡と思われるもの。（第8号）

第8号竪穴建物跡のみである。南西隅に焼土らしきものを発見したが、擾乱を受けていたため、良く確認できなかったものである。また、削平されて上端がほとんど残存していない状況であった。西には壁周溝がわずかに残り、柱穴はわりと壁際に配置されている。

III：諸般の事情でI IIのいずれとも判断つきかねるもの（第1・2・5・6・7・10号）

第2号は県道際のため激しく擾乱を受けている。検出された部分は西壁に沿って3個の柱穴が配置されている。第6号は全体の構造が明確ではない。検出された部分は、壁より50～60cmほど中央よりに4個の主柱穴が検出されている。上部は市道により削平されているが、西側の部分の掘り込みが最も深く、68cmを計る。第10号は、第3、9号と同様に、西壁と平行して走る溝を伴うと考えられる。溝の両端には2個の柱穴を伴う。第1、5号は、明確な主柱穴等が検出されなかった。

〔分布・性格〕

この種の遺構は、東北地方北半部に分布の中心をおき、広く東北南部、関東、中部、北海道南部にもみられる。青森県内においては尻八館（青森市）、根城跡（八戸市）、境閣館、独孤、茶毘館、中崎館（弘前市）、浪岡城跡（浪岡町）、古館（碇ヶ関村）、富山（平賀町）、尻八館（青森市）、蓬田大館（蓬田村）等の諸遺跡で検出されている。城館跡からの出土例が多く、多くの場合、掘立柱建物跡に伴う形で検出されている。時期は平安時代以降、中世のものとしてとら

えられている。遺構の性格については、住居跡、作業場、工房、倉庫、作業場、簡易兵舎、厩舎等の諸説があり、定説までに至ってはいない。遺構内出土遺物が極めて少ないため、いずれの説をも裏付ける決め手とはなっていないのが現状である。工藤清泰氏は、掘立柱建物跡、竪穴建物跡については伴出遺物を明確にできないのは当然であり、景観的な構造区分がなされたいたのではないだろうかとしている。浪岡城跡では、屋敷地内に掘立柱建物跡に付随する状況で竪穴建物跡が存在する例および竪穴建物跡が主体となる例があるとして、階層的な意味合いを強く有して併存していたことを示唆している。三宅徹也氏は、倉庫群、作業場群という各々限定された機能、集落の構造に基づいて整然とした立地を与えたものとしてとらえている。

2 SF II かまど状遺構

本遺跡で検出されたかまど（状）遺構は6基である。かまど遺構は、県内において、境関館遺跡で129基、浅瀬石遺跡で2基、根城跡で9基検出されている。岩手・秋田両県でも報告がある。この種の遺構に対して付された名称も様々であるが、廚房施設としての「かまど」である可能性が高い。構造は半地下式で、地山を掘り込むものと粘土を貼って構築するものの2種類がある。時期は概ね中世から近世初頭が想定されている。住居跡に付隨する古代かまどと中世かまどが併存することはなく、竪穴住居跡から掘立柱建物跡という住居構造の変化により必然的に中世かまどが発生したものと考えられる。この時期には、中世かまど+掘立柱建物跡+竪穴建物跡+井戸跡がセットとして成立していたものと思われる。本遺跡で検出されたかまど（状）遺構は、境関館遺跡のものと比べて遺存状態が非常に悪い。第10号でさえ燃焼部が押しつぶされた形あり、全体の構造を把握するには至っていないため、論考は差し控えさせていただく。

3 SE 井戸跡

本遺跡で検出された井戸跡は12基である。検出数は発掘面積の割に多い。検出位置は、調査区域の中心部、丘陵の東縁に集中している。各井戸とも湧水のために調査に支障をきたしたほどであり、当時から豊富な水量があったものと思われる。第9号井戸跡は保存状態の良好な井戸枠が、第4号井戸跡からは井戸枠の一部が検出された。その他は素掘であると思われる。開口部は円形ないし稍円形である。第4号井戸だけは上屋構造を伴う可能性が高く、かつ円形の張り出しを有する。規模の平均は、上端で径1.4m前後、深さは1.8m前後である。

井戸跡からは土器、木製品、種子など多種多様な遺物が出土し、量も比較的多い。その内容からして、井戸廃絶にあたって祭祀が行われた可能性が高い。近年まで、そのような習慣があったことは年配の方々からも聞いている。第6号井戸跡からはトチやモモ（？）の種子、小枝木製品、曲物の枠等が検出された。

井戸をめぐる祭祀については、駒見和夫氏の詳細な論考がある。それによれば「新潟、福島、岩手県等では、埋井の際に小枝と少量の葦を中心に投じる習慣があった。これは井戸に宿る神靈に対して『ウメてヨシ』との承認を得る呪術的な儀礼であり、井戸の存否がイエや集落の存続にかかわる問題であることを示している。」また、埋井に際しての祭祀に関しては、「平安から室町時代にかけて、井戸内の堆積土に炭化物や灰、黒色の土層、火との係わりのある事柄として焼けた礎等の出土が注目される。出土遺物は、意識的に納置・埋納されたものと偶然に混入したものの2種類があり、埋井に際して単なる廃棄は行われない。」とし、「①それ自体が呪術的性格を持つ祭具としては、簀串、箸状木製品、櫛、柄杓(杓子、匙)、鳥形木製品、木製仏像五輪塔、種子(モモ、ヒヨウタン、クレミ、ウリ——邪氣を避ける性格を有する)がある。②祭祀行為に係わるものとしては、竹、焼けた礎、火鏡白(ひきりうす)がある。③日常使用されている道具としては、土器や陶磁器、曲物、木皿等の木製品、砥石や石臼塔の石製品、刀子や釘等の金属製品、鉄滓がある。土器を除いてほとんどが破損品で、完形土器は壺や高环といった供献形態。破損品は鎌倉・室町時代に種類や数量が多く、井戸の中位付近中心にして検出されている。」とのことである。

本遺跡の場合も、上記の祭祀に関する遺物が多く出土している。このことは、生活に欠くことのできない水を湧出する井戸に対する、当時の人々の考えが如実に現れている結果としてとらえることができよう。

(新岡 嶽)

第2節 内真部(4)遺跡の掘立柱建物跡

八戸工業大学 高島 成侑

1. はじめに

この遺跡は、中山山脈の東縁で内真部川の南側にある丘陵の末端に位置していた。標高は低く9~12mで、調査区域の東側はさらに低くなつて水田が広がつていた。発掘調査は、1992年4月20日から6月30日まで行われたが、その間になんか現場を訪れて、柱穴の並びや大きさや深さなどについて検証することができた。

調査においては、後述する掘立柱建物跡のほかに、竪穴建物跡・土坑・甌跡・溝跡・井戸跡などが検出されている。

出土した遺物の調査によると、平安時代の土師器がもっとも多く出土しており、12世紀とみられるかわらけがあり、さらに中世の陶磁器や古銭があり、また、18世紀以降の陶磁器も出土しているといふ。

かなりの長期間にわたる複合遺跡であり、検出された掘立柱建物跡もそれぞれの時期に対応するものがあることが想定された。ここでは、これまでに検出された9棟の掘立柱建物跡について、その平面形式や柱間寸法の分析から、それぞれの掘立柱建物跡の時期を推定した。

埋蔵文化財調査センターの担当者の方々には、現場調査が終わってからも図面の整理や資料の提示などでお世話をいただいた。掘立柱建物跡の検出が今少し早くになされないと、さらに詳細な考察が可能となつたことを考えると、かなりのご迷惑をお掛けしたこととなる。感謝とともにお詫びを申し上げたい。調査指導員として参加された弘前大学の村越 潔教授には、いつもながらの適切なご教示と暖かい励ましとをいただいたことに、深く謝意を表するだいである。

2. 掘立柱建物跡の検出

第1号掘立柱建物跡および第2号掘立柱建物跡としたものは、調査の現場ですぐに確認されるほど柱穴の並びが明瞭なものであった。ともに〔3間に2間〕というもので間仕切は無く、その規模もほぼ同じものであった。第1号については、柱穴の一つが調査区の外にあるものとした。

これらと重複する形で第8号掘立柱建物跡が検出された。ほぼその1/4が調査区の外となるために、全体の平面形は捉えにくいが、これも〔3間に2間〕のものとすることができますようである。あるいは純柱のものが想定される。

第3号掘立柱建物跡も現場で捉えることができたものであり、第1号溝跡よりは新しいもの

であることが、これに伴う柱穴と溝跡との切合から判明している。先の2棟と同様に〔3間に2間〕という平面であるが、なかに柱穴が一つ確認され、これによって間仕切されたものとみることができる。

これと重複して第7号掘立柱建物跡が検出された。今のところ〔2間に1間〕という形のものであるが、調査区の外に続くものとみられる。第3号との柱穴の切合は無く、その新旧は不明である。

第4号、第5号、第6号とした3棟の掘立柱建物跡は、ほぼ同じ地区に重複して検出されたものである。現場ではともに〔1間に1間〕のものとして検出したのであるが、調査が進み図面が完成してからは、さらに大きなものとみることができるようになった。すべて調査区外に延びる形であるが、この段階では第5号掘立柱建物跡がもっとも大きくて〔7間に2間〕のものとみられ、第4号掘立柱建物跡は〔5間に2間〕で〔1間に1間〕の突出がある形を示している。第6号掘立柱建物跡は、現段階でも〔1間に1間〕であるが、これも調査区外に延びるものかもしれない。

第9号掘立柱建物跡としたものは、第4号井戸跡を跨ぐような形で検出され、この井戸の上に屋根を架けるためのものとして捉えられた。2本の掘立柱による井戸の覆い屋根とみられたものは、弘前市の中崎館遺跡においても検出されている。このような形で井戸を覆う架構が、ほかの遺跡においても数多く検出されてよさそうなものであるが、今のところ、ここを含めて2例だけのようである。

3、柱間寸法と建築年代

第1号および第2号掘立柱建物跡の柱間寸法をみると、桁行方向についてはともに各柱間を8.50尺としており、梁間方向では、第1号が8.00尺であり、第2号では7.50尺となり、第1号が梁間で1.00尺長いものとなっている。

第8号の柱間寸法は桁行きで6.50尺と8.50尺とがあり、梁間では6.50尺と11.0尺とが用いられており、これではやや不規則な寸法とみられ、さらに大きな規模のものかともみられるが、現段階では不明である。

これら3棟は同時には存在し得ないものであるが、柱穴の切合からはその新旧を判別することができず、柱穴の大きさや柱間寸法から第1号がやや古いものかとみられた。

第3号掘立柱建物跡の柱間寸法は、桁行きも梁間もともにすべての柱間が9.00尺と計測される。第7号掘立柱建物跡では、その柱間寸法は、桁行梁間とともに7.50尺という数値を示している。この2棟の重複においても柱穴の切合は無く、その新旧は不明であるが、その寸法数値からは第3号掘立柱建物跡が古いものとすることができよう。

第9号掘立柱建物跡の2本の柱間寸法は7.50尺となっている。第4号井戸跡は、ここから出土した遺物によって古代の末に近い段階のものとみられており、この掘立柱建物跡も同時期とされるとすれば、県内で検出されたこの種の掘立柱建物跡では古いものとなる。

以上に述べた6棟の掘立柱建物跡は、その柱間寸法からすると、ともに古代のものとみることができるものであるが、出土遺物との関係からは明確にその時期を捉えることができなかつた。しかし、これら3棟が検出された区域には、中世や近世のものはほとんどみられないという、現場での知見がある。

しかしながら、ここで検出された掘立柱建物跡は、今の段階では、第3号掘立柱建物跡に間仕切がみられ、第8号掘立柱建物跡が総柱のものとみられるほかは、すべて〔3間に2間〕という同じ平面を示しており、平面形式の上からその時期を推量することも不可能であった。

第4号掘立柱建物跡の柱間寸法は8.50尺を基準としているようであるが、5.50尺あるいは5.00尺という数値も用いられている。第5号掘立柱建物跡においては寸法の数値はさらに多くのものが用いられている。梁間の2間はともに9.00尺であるが、桁行では8.50尺、8.00尺、7.50尺、6.50尺というように数種類の寸法がみられる。第6号掘立柱建物跡については、現段階ではともに7.50尺という寸法を示している。

これらの3棟が検出された区域においては古代の遺物はさほど多くなく、中世の陶磁器が他の地域よりも多く出土していることが現場で確かめられている。この知見からすると、これらの掘立柱建物跡は中世のものとみることができるかもしれない。

4、むすび

検出された掘立柱建物跡は、ほとんどが単純な形のもので、平面形式はそれぞれの年代を考えるデータとしては用いることができなかつた。また、重複している場所においても掘立柱建物跡の柱穴の直接の切合が見当たらず、狭い範囲でも、その新旧を判断することもできなかつた。しかし、上述したように、そこに用いられている柱間寸法を比較することによって、おおまかにその年代を区分したのであるが、調査区のなかでの時期的に対応する区域があるようであつた。

これらの掘立柱建物跡は、年代的には古代のものから中世にかけてというかなりの幅があるにもかかわらず、いずれもほぼ同一の軸方向を示していることが注目された。このことについては、遺跡全体の広がりからすると、今回の調査区はここから低地に下りるという縁辺部に当たっている。そのような場所に建ち並ぶ建物跡としては、地形の影響を少なからず受けることとなり、似通った軸方向を示すこととなるものと解された。

第3節 出土遺物について（若干のまとめと問題点）

内真部(4)遺跡から出土した遺物（縄文土器を除いて）には、土器、陶磁器、鉄製品、銅製品、木製品、石製品、その他がある。年代的にはほぼ11世紀（？）から19世紀までの期間内に使用されたものである。ここでは遺構の内外から出土した土師器、須恵器、擦文土器、陶磁器を概観し、今後の課題についても若干触れておきたいと思う。

土師器

遺物全体の中では数量的に最も卓越する。

器種的には壺、甕、壺、把手付、堀、皿（かわらけ）の6種に分けられる。

(1) 壺

●成形　すべてロクロ成形によるもので、水挽成形後の再調整を加えないものが多く、器壁の薄いものも目立つ。外底面のほとんどには回転糸切痕が認められるが、遺構外-12、17は静止糸切の可能性がある。

●口縁部の形態　およそ次の5種が認められる。微妙に外反するもの（S B02-4、S E07-1、遺構外-2、5、26、30、37）、大きく外反するもの（S T06-4、遺構外-8、7）、体部の持つ傾きを崩さずにそのまま伸びるもの（S T02-1、S T06-2、S E04-1、S E07-2、遺構外-27、29、33）、口唇部が若干、肥厚するもの（遺構外-1、6）、内面にわずかな稜を持つもの（遺構外-1、4、25、26、28、36）などである。

●底部の形態　およそ次の4種が認められる。底部がくびれ、高台状となるもの（S T08-1、S K16-3、S E04-3、遺構外-7、9、10、11、12、14）、くびれがあまり顕著でなく、斜めに立ち上がるもの（P i t 2-1、S T02-2、4、S T06-1、S K16-1、遺構外-13、15、16、18、19、20、21、22）、若干上げ底風になるもの（遺構外-10、13、15）、底部の器壁が非常に薄いもの（遺構外-12、18）などが見られる。

●胎土　海綿骨針や赤色の小砾を含むものもあるが、細かく見ると相当なバラエティが認められる。全体的には、砂粒をあまり含まないものが多い。

●その他　注目すべき資料としてS T08-1の小型壺があげられる。ロクロ水挽成形により作られたもので、外面にはその成形痕が明瞭に観察される。底部は高台状を呈し、外底面には回転糸切痕が見られる。この資料はS T08内にかかる調査区域境界（断面部分）から出土したものであるので、遺構内でどのような在り方をしていたのかは不明であるが、焼土を多く混入した層の上面から倒立の状態で出土しているため、調査区外にあるカマドに接近して存在したものかと想像されるものである。本資料はその出土状態と、類例に乏しい器形から見て、本遺跡内では特別な使われ方をしていた可能性があると思われる。他の資料とセットで出土した資料

ではないため、年代的な部分については断言を避けたいが、S X02-4の土師器皿(かわらけ)の口径とほぼ等しい点は十分に留意して良いのではないかと思うものである。

(2) 壺

●成形　すべて粘土紐の積みあげによるものと思われ、ロクロ使用のものは全く見られない。口縁部上位の内外面を横ナデした後に胴部外面に縦ヘラケズリによる調整を加えるものが多い。胴部中央から上位の縦ヘラケズリは器体を倒立させて行なうものであり、そのケズリの隙に生ずる余分な粘土によりかすかな段(S E07-3、遺構外-40、42、60)が作出されるものもある。胴部中央から下位の縦ヘラケズリは器体を正立させた状態で行っているものである。

●口縁部の器壁　薄いもの(遺構外-38)から厚いもの(遺構外-51、54)まで様々見られる。

●口縁部の形態　非常にバラエティに富むが、およそ次の5種が認められる。弱くなめらかに外反するもの(ST02-6、遺構外-56、57、59)、強くなめらかに外反するもの(遺構外-38、43、50、51)、「く」の字状に外反するもの(S E07-3、遺構外-52)、ほとんど外反しないもの(遺構外-54、55)、端部が肥厚するもの(遺構外-39、53、58)などである。

●底部　良好な破片に恵まれず、2点のみしか図示出来なかった。底部外面にはスダレ状の圧痕が観察されるものが多いようである。胎土には砂粒を多く含む。

(3) 壺

破片がST06とSE04から出土している。ST06-12は、口頭部、胴部、底部の破片を図上で合成して作図しているため、本来の器形とは異なっている可能性があることを先ず断っておく。外面は縦位のケズリの後、口頭部には横ナデ、胴部には横方向のミガキ、底部付近には縦位のミガキが施され、内面の口頭部と胴部には横方向のミガキ、底部にはほぼ放射状のミガキが施され、内面全体に黒色処理がなされる。外面の色調は黄褐色～橙色を呈する。

焼成は本遺跡出土の壺や甕と大きく異なり非常に堅敏で、焼成方法が異なっていることが伺える。なおST06-12とSE04-9は、同一個体の可能性が高いと思われる。

(4) 把手付

把手部分が遺構外から1点のみ(遺構外-44)出土している。器本体に向かってケズリを施し、中空である。色調は明桃色を呈する。遺構外-45も把手付の可能性があるが断定はできない。

(5) 場

口縁部破片3点(Pit 1-1、Pit 3-1、SE11-1)が出土しているが、Pit 1-1とPit 3-1は同一個体の可能性もある。横方向のケズリを外面に施した後に口縁上部を横方向に撫でており、甕の成形手順とは逆のようである。3点とも外面には煤状の炭化物が付

着している。

(6) 皿（かわらけ）（第72図参照）

すべて破片である。量的には $33 \times 25 \times 5$ cmのデスクトレイで約半分ほどである。個体数は特定できないが、30個体には満たないようである。本遺跡出土の壺などと比較してやや軟質の焼成であるため、割れ口が摩滅しているものも数多い。青森県内においても僅少なこの「かわらけ」については、十分な形態分類を行うべきではあるが、SX02-4以外はほとんどが小破片資料であり、限られた一部分の破片の形態を重視して分類することは非常に不確実なものとなるだけであるため、ここでは形態に偏重することを避けて記載する。

●製作と調整 全て手づくね成形によるもので、ロクロ成形のものは1点もみられない。

すべての資料の口縁部内外面には横ナデが施され、体部外面と外底面は無調整である。

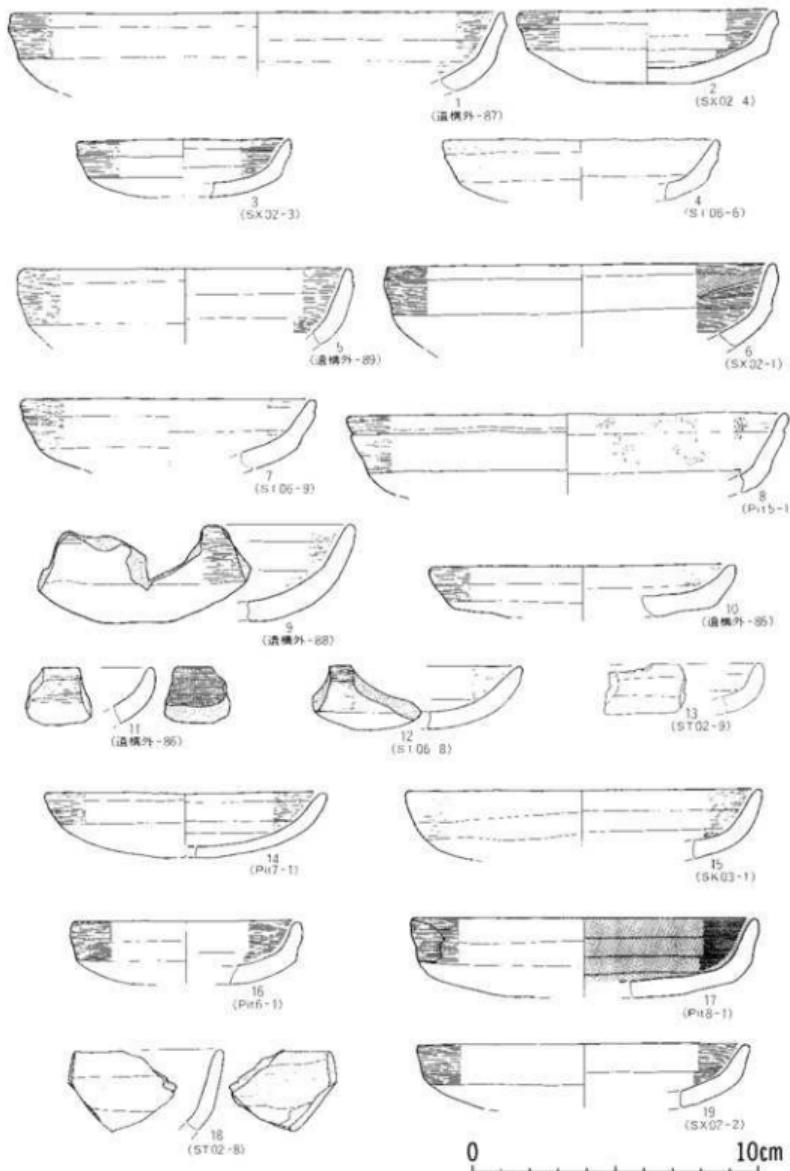
横ナデのほとんどは二段ナデであるが、SX02-2だけは一段ナデであり、技法的、型式学的には前者よりもやや後出のものと思われる。二段ナデで成形されたものには、内外面に上段と下段のナデの境界線が明瞭に観察されるものとあまり明瞭には観察されないものとがある。また、上段を撫でた際に口縁部を強くつまむようにして撫でたもの(SX02-4、遺構外-87)は、断面形態にその技法がよく表われている。

内底面の一方向ナデはpit7-1とpit8-1の2点のみには観察されるが、他のものには観察されない。これは良好な破片に恵まれなかったことと、使用過程において磨滅してしまったという想定を考慮すれば取り立てて重視する必要はないようと思えるが、県内で出土する土師器皿の系譜を考える上でこの内底面の一方向ナデの技法とその有無を確認する作業は今後さらに継続させる必要があろう。

なお、pit7-1のかわらけは、本遺跡内で出土するかわらけの中でも幾分特殊である。二段ナデ成形によるものでありながら断面形態にはほとんど屈曲部が認められずに丸みを帯び、胎土も極めて精選され、硬質で明黄白色を呈す焼成である。平安京跡などで出土する洛外産(伊野 1993)のものに酷似しており、この資料のみは搬入された可能性もある点を指摘しておきたい。

●法量 図上復元実測がほとんどであるため、口径の大きさには若干の誤差が含まれると思われる。5~8回にわたって口径を算出し、その平均値を求めて作図しているので原形の口径にはかなり近似していると思われるが、たまたま歪の大きい部分で口径を算出している場合はその口径はかなり大きな誤差を含んでいる可能性がある。

その結果かどうかの問題は別にして、口径のばらつきは非常に大きいと言える。口径の最小のものとしてはSX02-3(3)が7.6cmで、最大のものとしては遺構外-87(1)が17.6cmである。この遺構外-87は岩手県平泉町柳之御所跡で出土するかわらけと比較してもかなり大型と言え、



第72図 内真部(4)遺跡から出土した土師器皿集成図

本遺跡内でのかわらけの使われ方の問題をも含めて再考が必要であると思える。なお、口径の数値で大きく分類するならば、8cm前後のもの(3、16)、9.5cm前後のもの(2、4、14)、10.5cm前後のもの(7、10)、12cm前後のもの(5、15、17、19)、13cm以上のもの(1、6、8)の5つに分類が可能のようである。また因に、復元実測のできた資料のみであえて口径の平均値を求めれば、11.5cmという結果となる。

型を用いているような資料(S X02-4(2))も見られるが、本遺跡出土のかわらけの口径値にはばらつきが大きいため、何とも言い難い。法量に一定のまとまりが見い出せれば本遺跡内でのかわらけの製作体勢をうかがうことができると思われるが、今回の調査ではこれ以上口径値の持つ意味について述べることは無理である。

●胎土・焼成について 胎土はいずれの資料も非常に精選されている。本遺跡内で出土した土師器の壺などに含まれているような砂粒や海綿骨針などは含まれていない。しかし軟質な赤色の粒子～小礫をところどころに含むものは多く、意識的に混入させているかどうかの判定は困難であるものの、本遺跡内で出土する土師器の壺よりも顕著に混入されていることは事実である。全体的に黄白色～橙色の色調を呈するものがほとんどで、軟質とまでは言えないものの、決して硬質の焼成ではない。ただし弘前市中崎館遺跡出土のかわらけ(青森県教育委員会 1990)よりは硬質に焼成されるものである。なお、S T02-8とP i t 7-1のかわらけの胎土だけは極めて精選され、硬質の焼成であり、本遺跡内で出土するかわらけの中でもかなり特異な胎土である。

かわらけの胎土に関連して1つ付け加えておきたいものにS E04-4の小型壺がある。

本資料に施される連續山型文は擦文土器に見られる鋸歯状の沈線文に若干類似しており、擦文土器を模倣している可能性が非常に高いものであるが、胎土の面においては本遺跡で出土した他の擦文土器との共通点が全く見られない。非常に精選された胎土で、砂粒はほとんど含まないものの赤色の小礫を顕著に含み、橙色に焼成されるという状態などからみても本遺跡出土のかわらけの胎土に非常に近似している。本資料はかわらけと共に伴したものではないため、これ以上関連性について述べることはできないが、両者の胎土の類似性は強調しておきたい。

●黒色処理を施すもの P i t 8-1と遺構外-86の2点のかわらけの、内面は黒色を呈する。細かく言うとP i t 8-1の方は暗褐色で、遺構外-86は黒色を呈する。内面が黒色を呈するかわらけは、この2点のみで数量的には少ないものの、本地域に主体的に存在した土器製作の技法伝統、影響が強く反映した結果の所産であるものと思われ、今後重視されるべき資料と思われる。

●出土状況 遺構の内外から出土しているが、S X02、S T06ではわりとまとまった出土を示し、P i t からの出土傾向も決して低くはない。S T02からも破片が2点出土しているが、こ

れはその出土状況と資料自体の状態から考えて主体的な存在ではないと思える。

S X 02は前述のとおり埋土に炭化物層を含む特殊な遺構であるが、その確認面と底面からは破片がばらまかれたように出土しており、かわらけ以外の遺物の出土は見られない。この出土状態は何らかの祭祀的な行為にかわらけが伴っていたことを推測させるものであり、それは遺構の特殊性からも十分裏付けられよう。

ピットからは5点の資料が出土している。うちP i t 5-1以外から出土した3点の資料は、炭化物と焼土粒を多く含んだ杭跡状のピット（直径5~6cm程度で下端が円錐状を呈す）から出土している。これら3点の資料もその出土状態の特殊性から見て何らかの祭祀的な行為に伴った可能性を推測させる。

●年代観と系譜 ここであえて形態分類を行い、細かい時期差を明確にすべきところではあるが、同一個体でありながら口縁部破片のある一部分によっては、形態がくずれているものもあり、ごく限られた一部分の破片の形態を見て分類することは非常に不確実なものとなるだけであるため行わなかったが、結論的に言うと本遺跡で出土したかわらけはその製作技法や形態などの面から考えてすべて12世紀中葉から後葉の範疇におさまり、平安京跡などで出土する「洛外産」の「模倣型」（伊野 1989）と考えられる。また、青森県内でこれまでに出土しているかわらけの中でもより洛外産土師器皿に類似している点は、今後決して軽視できない点として認識する必要があろう。

(2)須恵器

S D 01の底面からは、壺の体部細片が1点（S D 01-1）出土し、遺構外からも同部位の細片が1点出土している。同一個体かどうか不明であるが、いずれも五所川原産のものと思われる。

(3)擦文土器

器種的には、いずれも壺である。調整技法の面ではハケメやミガキが施され、文様の面では刻文や平行沈線、貼付帯が巡らされるものがある。胎土、焼成にはバラエティが多く認められ、それらは本遺跡出土の土師器とも全く異なる。文様の面においても非常にバラエティが認められるが、以前に報告されている内真部遺跡の擦文土器（北林 1971）や、青森県稻垣村松枝遺跡の擦文土器（福田 1987）に類似したものが見い出せる。S E 04-4の鋸歯状文に類似した連続山形文が一巡する小型壺はかわらけの項でも触れたが、その類例は見出し難く、系譜の問題も含めて今後の追及課題を提供する遺物と言えよう。

(4)舶載磁器

ほぼ12世紀から13世紀に焼造されたものが4片、14世紀から15世紀にかけて焼造されたものが6片出土している。量的にも僅少で、いずれも細片である。

●白磁 調査区内をほぼ南北に走る道路（旧森林鉄道）の側溝部分の埋土から1点（遺構外-90）出土した。12世紀後半から13世紀前半頃の皿と思われる。

●青白磁 ST06から合子の蓋（ST06-13）が出土している。二次的に被熱しており、透明釉は無くなっている。12世紀後半から13世紀前半頃のものと思われる。

●青磁 12世紀後半から13世紀前半頃と思われる割花文の碗の口縁部破片（ST09-1、遺構外-95）がST09の確認面と遺構外から出土している。また、14世紀後半から15世紀前半頃と思われる碗が5片（遺構外-91、92、93、96、97）と14世紀代と思われる盤（遺構外-94）が1片出土している。

これら舶載磁器は大きく2つの時期に分かれる。すなわち12世紀後半から13世紀前半頃のものと14世紀後半から15世紀前半頃のものとに分かれる。前者の資料はかわらけの年代とも重複するものであるため、この時期の資料とかわらけの存在とを合わせて考えることが必要であるが、資料的、数量的に不十分であり、これ以上は何とも言い難いため今後の課題としておきたい。

(5)国産陶磁器

●珠洲 器種的には擂鉢と甕、壺がある。中でも擂鉢（片口鉢）が主体を占める。吉岡編年（吉岡 1982）のI～IV期（12世紀後半から14世紀）の範囲に納まるものであるが、主体を占めるものはIV期（14世紀代）のものである。ST06-11はI期の壺の口縁部と思われる。ST06からは土師器皿と青白磁合子も出土しているが、このST06-11もそれらとほぼ同時存在した可能性がある。IV期の製品は舶載磁器の14世紀後半から15世紀前半頃の資料と一時的に同時存在したものであろう。

●瀬戸美濃 ほとんどが細片で、器種と時期を決定できるものは灰釉の施された平碗1点（遺構外-98）のみである。ほぼ15世紀の古い段階の窯窓IV期（井上 1992）の製品であろうと思われる。他のものは産地の同定も含め、判然としないが天目（Pit 10-1、遺構外-100、101）、灰釉の碗（SD03-2、遺構外-99）がある。

●肥前、肥前系 舶載、国産を問わず、出土した陶磁器全体の中では数量的に最も卓越している。大橋編年（大橋 1989）のIII期の製品も若干含まれるが、IV期（1690～1780）の製品を中心である。なお、遺構内から出土したものは1点もない。

（木村 高）

第VIII章 自然科学的分析

第1節 内真部(4)遺跡出土鉄器の金属学的解析

岩手県立博物館専門学芸員 赤沼 英男

1 分析資料

分析した資料はNo.3刀子?、No.4刀子?、No.5刀子?の3点である。発掘報告者による試料の名称と遺物の出土地点を表1に、外観を図1に示す。

2 分析用試料の調整

鉄器の分析には保存処理する際に採取することができた鋳片を用いた。採取した鋳片のうち最大のものを組織観察に、他は化学分析に供した。分析用試料採取位置は図1に示すとおりである。

3 分析方法

組織観察用試料はいずれも樹脂に埋め込み、表面生成鋳層の垂直をできるだけ浅く削り取った後、ダイヤモンドペーストを用いて仕上げ研磨を行った。研磨の工程では試料中の化学成分の溶出を避けるため、水を一切使用しない方法をとった。研磨した試料は金属顕微鏡によるミクロ観察に供し、また、残存する代表的な金属介在物についてはEPMAによりその組成を決定した。

化学分析用試料は玉水、ふっ化水素酸を使って完全に溶解した後、全鉄(T.Fe)、銅(Cu)、マングン(Mn)、りん(P)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、チタン(Ti)、けい素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)、モリブデン(Mo)、クロム(Cr)を誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)により定量した。

4 分析結果

4-1 鉄器の化学組成

表2は鉄器から採取した試料片の化学組成である。T.Feはいずれの鉄器においても60~70%と低レベルにあり、錆化が進んだ試料が分析に供されたものと判断される。No.3刀子、No.4刀子のP分は0.1%強と高い値を示している。P分については埋蔵環境からの富化も考えられるため、

検出されたP分をただちにもとの健全な地金に含有されていたとみなすことは危険である。しかし、同一の埋蔵環境下にあったとみなすことのできるNo.5刀子のP分が0.067%と、上述の2点の鉄器に比べ低いレベルにあることを考慮すると、検出された高レベルのP分の多くはもとの健全な地金に含有されていた可能性が高い。

4-2 鉄器から採取した試料片のマクロおよびミクロ組織

図2は鉄器から採取した鋳試料片のマクロ組織である。白色部は健全なメタル、灰色部は黒錆、暗灰色部は赤錆、黒色部は亀裂および欠落孔を表す。分析を行った鉄器はすべて黒錆、赤錆、欠落孔によって構成されており、錆化が進んでいることがわかる。

図3は図2-c、No.5刀子の枠で囲んだ部分の反射電子像であるが、太さ1μm程度の網目状を呈した結晶の欠落孔が観察され、さらに内部には白色を呈した微細な細線状の結晶とその欠落孔が認められる。前者の網目状の組織は初析セメントタイトの欠落孔、後者はもとの健全な鋼におけるバーライト相のうちのフェライト部分が失われ、セメントタイトのみが残った組織と推定される。¹¹これらの組織からNo.5刀子の製作には炭素含有量0.8%強の過共析鋼が使用された可能性が高い。なお、No.3刀子、No.4刀子については、もとの健全な地金の状態を推定できる組織を見いだすことができなかった。

4-3 非金属介在物組成

図4-a₁はNo.3刀子の黒錆層中に見いだされた非金属介在物の反射電子像、図4-a₂は図4-a₁の枠で囲んだ部分をさらに拡大観察したものである。粒状の結晶が観察され、さらに結晶は灰色を呈した領域(W₁)と暗灰色を呈した領域(W₂)の2相からなる。図4-bはEPAMによる波長分析結果である。結晶(W₁)からはFeが、結晶(W₂)からはFe、Mgが強く検出されており、前者はFeO、後者は(Fe,Mg)Oと判定される。

なお、No.4およびNo.5刀子については錆化が進んでおり、非金属介在物を見いだすことができなかった。上述の非金属介在物の分析結果を整理すると表2の右欄に示すごとくになる。

6 考察

ミクロ組織中にセメントタイトおよびその欠落孔が観察されたNo.5刀子は鍛造鉄器である。ミクロ組織中にセメントタイト、もしくはその欠落孔を見いだすことはできないが、No.3刀子についても非金属介在物組織からやはり鍛造鉄器と判定される。No.4刀子についてはNo.3鉄器と器種が同じであることを考慮すると、やはり鍛造鉄器とみるべきであろう。なお、No.5刀子の製作にあたっては過共析鋼が使用された可能性が高いものと判断される。

地金の製造にあたって使用される原料鉱石は、砂鉄と鉄鉱石の2つである。鋼の製造過程において砂鉄が使用された場合、還元雰囲気(酸素分圧)に応じ砂鉄中の $\text{FeO} - \text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{TiO}_2$ 系チタン化合物は還元され、ウルボスピネル($2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、イルメナイト($\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)へというようにチタンの濃縮された化合物へと順次変化する。このようにして生成したチタン化合物の多くは、鉄滓として鋼から分離・除去されるが、その一部は非金属介在物に残る。

表2の最右欄に示すように、No.3刀子についてはウスタイトによって構成される非金属介在物が観察された。ガラス質けい酸塩は確認されなかったが、ウスタイトはMgを固溶した(Fe, Mg)Oと FeO の2相からなっている。炉壁に生成している(Fe, Mg)Oを巻き込んだ鉄浴の再酸化物と考えることができる。従って、No.3刀子の製作に使用された鋼は、P含有量の高い鉄鉱石を原料鉱石として製造された可能性が高い。他の2点の刀子については地金中に非金属介在物を見いだすことができなかつたため、鋼の製造に使用された原料鉱石について判定することはできない。ただし、No.4刀子についてNo.3刀子同様P含有量の高い原料鉱石によって製造された鋼を素材として製作されたことを指摘できる。

註

- 1) 日吉製鉄史同好会「稻荷山鉄劍の六片の鑄」『鐵の文化史』東洋経済新聞社 1984年

表1 鋼器の出土遺物

資料名	遺物
No.3刀子?	9号井戸ツク土
No.4刀子?	9号井戸ツク土
No.5刀子?	9号井戸ツク土

表2 内装部も通路出土鉄器の分析結果

資料名	化 学 成 分 (%)													N.M.I.		
	T	Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Cr	Si	Ca	Al	Mg	V	Mo	Cr	ミクロ組織
No.3刀子?	67.97	0.095	0.099	0.117	0.015	0.014	0.011	1.7%	9.01%	9.017	9.018	0.082	0.092	0.094	no	W.W.
No.4刀子?	69.20	0.002	0.005	0.279	0.014	0.024	0.009	1.6%	-	-	-	-	-	-	no	no
No.5刀子?	69.09	0.003	0.002	0.067	0.016	0.017	0.005	0.056	0.004	-	0.001	0.007	0.008	0.004	Ce(誤算削除)	no

注1) N.M.I.は非金属介在物組成、W₁は FeO 、W₂は(Fe, Mg)Oを表す。

注2) 分析せず、noは観察されずを表す。

注3) Ceはセマンタイトもしくはその欠陥孔を表す。



図1 分析資料の外観



図2 鉄器から採取した試料片のマクロ組織

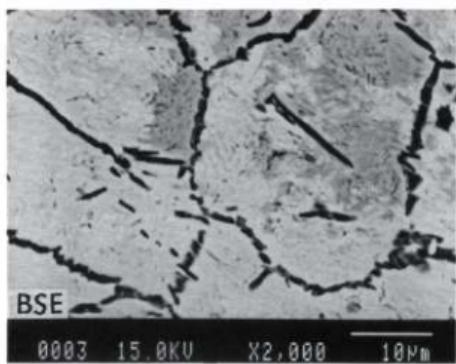


図3 No.5 刀子から採取した試料片の反射電子像

図2-c の枠で囲んだ部分を観察したものである。

写真① 鉄器の金属学的解析 1

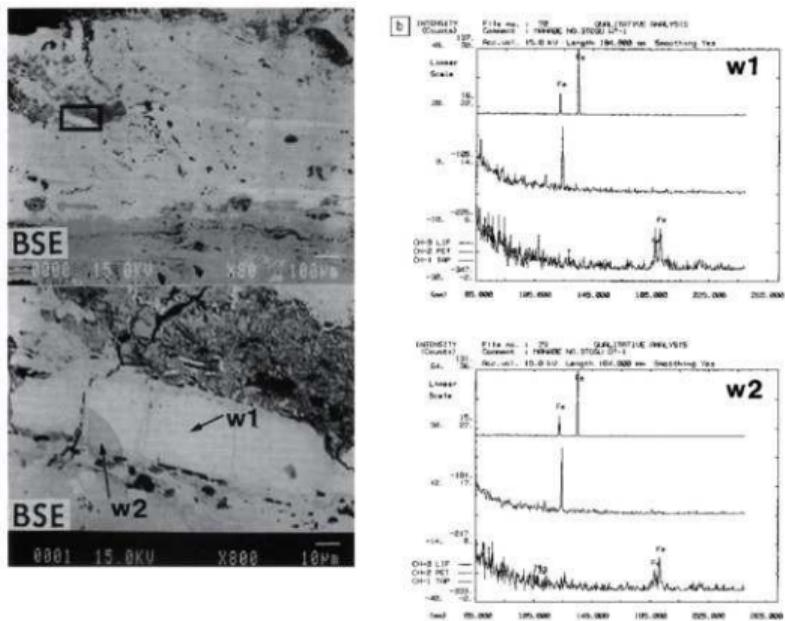


図4 No.3 刀子?に見いだされた非金属介在物の反射電子像とEPMAによる定性分析

図4-a₂は図4-a₁の枠で囲んだ部分をさらに拡大したものである。

w₁: FeO

w₂: (Fe, Mg)O

写真② 鉄器の金属学的解析 2

第2節 内真部(4)遺跡出土の陶器の蛍光X線分析

奈良教育大学教授 三辻 利一

1 はじめに

須恵器の産地推定に使われた手法はそのまま、中世陶器にも適用できる。ただ、須恵器ほど中世陶器については窯跡出土陶器の基礎データは整理されていない。それでも、越前陶器、珠州陶器、常滑陶器、瀬戸陶器、猿投陶器を中心として、主として、東日本の窯跡出土陶器の化学特性は筆者のところでまとめられている。これらのデータを使って、試験的に産地推定の研究も進められている。

本報告では、内真部(4)遺跡から出土した中世陶器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2 分析結果

試料片はすべて粉碎し、粉末試料を錠剤にして結果X線分析を行った。波長分散型の完全自動分析装置（理学電機製 3270型機）を使用した。岩石標準試料JG-1を標準試料として定量分析を行った。全分析地はJG-1による標準化値で表示された。

表1に全分析値をまとめてある。産地推定のデータ解説には越前陶器か珠州陶器かの2群間判別分析法を使用した。既に、両群の相互識別は完全であることは報告されている。そこで、表1に示された25点の試料について、珠州群、越前群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。その結果も表1の右端の欄に示されている。各母集団への帰属条件は通常は $D^2(X) \leq 10$ である。ただし、(X)は母集団名である。この帰属条件は5%の危険率をかけたHotellingのT²検定によって求められる。表1をみると、越前群への帰属条件を満足する試料は1点もないことがわかる。つまり、越前陶器である可能性をもつ試料は1点もないということである。これに対して、ほとんどすべての試料は D^2 (珠州群) ≤ 10 の帰属条件を満足する。No8、17の2点は D^2 値がそれぞれ12、11で、ほんの少し、帰属条件からはずれる。しかし、この程度のずれでは珠州陶器である可能性は十分あると思われる、(?)を付して珠州陶器であろうと推定した。この結果、今回分析したすべての中世陶器は珠州陶器であると推定された。そのRb-Sr分布図を図1に示す。窯跡出土珠陶器をもとに描かれた珠州領域によく対応していることがわかる。なお、新潟県の笛神丘陵の北沢窯には全く対応しなかったことを断っておく。

なお、No6の須恵器であるが、全因子で五所川原窯群によく対応しており、五所川原産の可能性をもつ。これに対して、No3、24の須恵器にはFe量が少なく、五所川原産ではないと判断された。小泊窯の可能性も含めて、日本海沿岸からの搬入品である。この非五所川原産の須恵器についてはいざれ、一括して、比較検討する必要があろう。

表1 内真部(4)遺跡出土中世陶器の分析データ

試料番号	時代	K	Ca	Fe	Mn	Sr	Na	D ²⁰⁴ Rb	D ²⁰⁸ Rb	産地	備考
1	古墳	0.438	0.228	2.81	0.288	0.040	0.287	1.2	32	福井	無
2	古	0.418	0.511	3.11	0.108	0.318	0.103	7.9	53	福井	無
3	古代	0.399	0.505	3.37	0.252	0.309	0.131	10.0	90	本州	近畿圏 (?)
4	古~近	0.217	0.276	1.78	0.186	0.168	0.204	6.0	45	近畿	無
5	古	0.322	0.373	1.75	0.249	0.202	0.119	2.8	36	福井	無
6	古~近	0.364	0.228	3.32	0.179	0.303	0.221	9.0	41	近畿圏	無
7	古~近	0.363	0.237	2.36	0.107	0.419	0.213	1.8	60	近畿	無
8	古~近	0.413	0.477	2.19	0.506	0.349	0.281	27.9	98	近畿	無
9	古~近	0.427	0.167	2.29	0.566	0.209	0.168	3.9	16	福井	無
10	古	0.416	0.595	1.39	0.328	0.328	0.255	2.1	29	福井	無
11	古	0.418	0.261	1.74	0.380	0.348	0.368	5.6	45	福井	無
12	古	0.419	0.242	3.42	0.268	0.313	0.289	1.1	40	福井	無
13	古	0.412	0.236	3.69	0.186	0.417	0.276	9.1	21	福井	無
14	古	0.389	0.489	1.81	0.165	0.279	0.298	9.5	510	福井	無
15	古	0.403	0.387	1.33	0.323	0.358	0.339	1.1	78	福井	無
16	古	0.325	0.195	2.33	0.477	0.376	0.225	6.6	37	福井	無
17	古	0.365	0.156	1.81	0.293	0.391	0.312	11.0	191	近畿	無
18	古	0.423	0.236	3.69	0.301	0.343	0.199	3.9	74	福井	無
19	古	0.425	0.173	1.73	0.521	0.428	0.239	3.0	29	福井	無
20	古	0.413	0.377	2.36	0.553	0.314	0.268	8.1	34	福井	無
21	古	0.454	0.259	1.71	0.328	0.322	0.282	1.1	47	福井	無
22	古	0.423	0.366	1.89	0.323	0.367	0.111	1.9	53	福井	無
23	古~大	0.277	0.211	1.77	0.501	0.285	0.307	3.3	13	福井	無
24	古~大	0.398	0.166	2.25	0.479	0.329	0.438	9.3	53	本州	近畿圏 (?)
25	古~大	0.394	0.211	2.35	0.361	0.397	0.161	20.9	73	福井	近畿圏 (?)

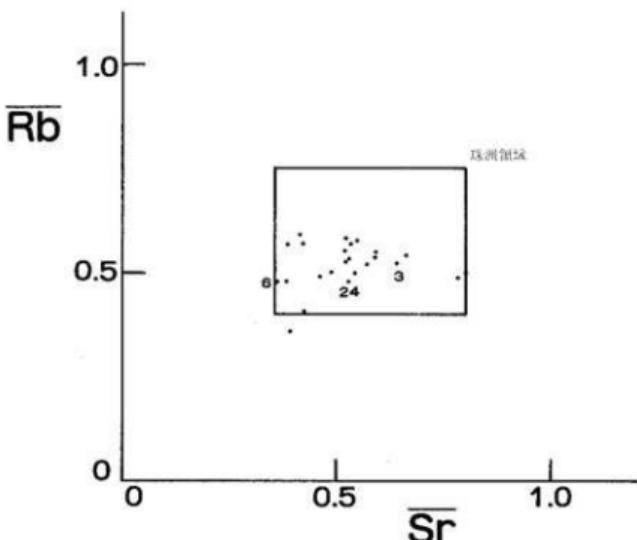


図1 内真部(4)遺跡出土陶器のRb-Sr分布図

第3節 年輪年代法による内真部(4)遺跡 出土の井戸柱材・曲物の年代測定

奈良国立文化財研究所

埋蔵文化財センター 光谷 拓実

青森県では、高野川(2)遺跡から出土したヒバ材の井戸柱材の年輪データを使って、924年～1325年までの曆年標準パターンができている。この他には、秋田、山形両県下で出土したスギ材の木製品の年輪データで121年～1412年までのものを作成している。この2種類の曆年標準パターンは、東北地方の遺跡出土木材や古建築部材の年輪年代測定に応用され、多くの成果をあげている。

内真部(4)遺跡からは、ヒバ材を使った井戸が2基（4・9号）検出された。4号井戸からは2点の井戸柱材を、9号井戸からは1点の井戸柱材と井戸柱内の埋土から出土した曲物底板1点を選定し、これらの年輪年代測定を行った。以下にその結果を報告する。

〈試料と計測方法〉

選定した試料は、いずれも柾目板を使用したものである。材種は顕微鏡による木材組織の識別の結果、すべてのヒノキアスナロ (*THujopsis dolabrata* S.etZ var. *Hondai* Makino) であった。年輪幅の計測は、専用の年輪読取器（実体顕微鏡付で0.01ミリまで計測可能）を使用し、おもに柾目面から直接おこなった。計測、収集した年輪データはコンピュータに入力し、上記の曆年パターンとの照合に備えた。コンピュータによる年輪パターン照合は相関分析手法によった。

〈結果〉

4点の年輪パターンと上記2種類の曆年標準パターンとの照合はいずれも成立しなかった。曆年標準パターンを構成する年輪データが少ないため、まだ標準パターンはなっていないことが考えられる。一方で、4点の年輪パターンが毎年の気候変化を敏感に年輪形成に反映していないことも原因として考えられる。そこで、現生の木曾系ヒノキの標準パターンと青森ヒバの標準パターンとの間には高い相関関係のあることが判明しているので、木曾系の歴年標準パターンを検討したところ、内真部(4)と比較照合してみることにした。その前に、試料4点の間の相互の相関を検討したところ、内真部(4)遺跡出土の井戸柱材の年輪パターンと曲物底板の年輪パターンとが合致したので、双方の年輪データを重複した年代位置で平均し、ひとまず221年分の平均値パターンを作成した。これと木曾系ヒノキの歴年パターンとを照合したところ、221年分

の年輪パターンは、1237年～1457年のものであることが確定した。つまり、No 3 の井戸枠材の年輪年代は1420年、No 4 の曲物底板のそれは1457年と判明したのである。したがって、この2点の伐採年は1457年以降となる。2点には、辺材部が残存していない形状のものであるので、少なくとも辺材部に刻まれていた年輪層数を加算すると、原材の伐採年は1500年前後の年代が推定できる。

また、ヒバの曆年標準パターン(924年～1325年)を、1457年まで新しく延ばすことができた。この標準パターンは依然としてパターンを構成する年輪データが少ないので、今後一層の年輪データの収集に努めなければならない。

第1表 内真部遺跡 第8、9号井戸枠材・曲物の年輪年代

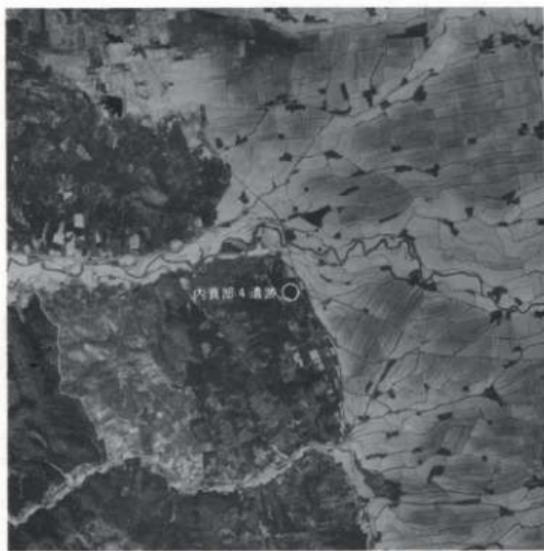
No	遺構	試料	計測年輪数	年輪年代
1	第8号井戸	井戸枠材	114	——
2	第8号井戸	井戸枠材	190	——
3	第8号井戸	井戸枠材	184	1420年
4	第8号井戸	曲物底板	148	1457年

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1973『東北新幹線関係遺跡分布調査報告(津軽半島)』青森県埋蔵文化財調査報告書 第6集
- 青森県教育委員会 1977『石上神社遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第35集
- 青森県教育委員会 1980『金木町神明町遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第58集
- 青森県教育委員会 1981『茶罈船遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財報告書 第110集
- 青森県教育委員会 1983『青森県の中世城館』
- 青森県教育委員会 1984『浜田遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第80集
- 青森県教育委員会 1986『狹御跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第99集
- 青森県教育委員会 1987『境間遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第102集
- 青森県教育委員会 1990『中崎船遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第129集
- 青森県立郷土館 1981『尻八船調査報告書』
- 鰐・沢町教育委員会 1989『稚里城跡第1次発掘調査報告書』町文化シリーズ11
- 鰐岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1991「[1] 湾之御所跡」「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成2年度)」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第159集
- 鰐岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1992「[1] 湾之御所跡」「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成3年度)」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第178集
- 鰐岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1993「[1] 湾之御所跡」「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成4年度)」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第195集
- 京都府教育委員会 1980『埋蔵文化財発掘調査概報』第3分冊
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1991『柴田コレクション展』(II)【資料編】
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984『国内出土の肥前陶磁』
- 珠洲市立珠洲焼資料館 1989『珠洲の名陶』
- 東京大学遺跡調査室 1989『東京大学本郷地区内の道路 理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1
- 東京消防庁・新宿区四谷三丁目遺跡調査 1991『江戸遺跡検出のやきもの分類(兼凡例)四谷三丁目遺跡』
- 東京都新宿区教育委員会 1988『三宋町遺跡』
- 東北陶磁文化館 1987『東北の近世陶磁』
- 浪岡町教育委員会 1989『浪岡城跡X-内館調査の成果とまとめNo.1』
- 奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所 史料第27冊
- 函館市教育委員会 1990『特別史跡五稜郭跡函館奉行所発掘調査報告書』
- 函館土木現業所 奥尻町教育委員会 1979『奥尻島青苔遺跡』
- 平凡社 1988『古伊万里』別冊太陽63号
- 平凡社 1984『やきもの事典』
- 蓬田村教育委員会 早稲田大学文学部考古学研究室 1987『蓬田大船遺跡』
- 市田京子 1992『江戸時代の下駄』『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会5回大会発表要旨
- 一色八郎 1990『簞の文化史』お茶の水叢書
- 井上嘉久男 1992『尾張陶磁』ニューサイエンス社
- 伊野近富 1987『「かわくわ」考』『京都府埋蔵文化財論集第1集 創立5周年記念誌』財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊野近富 1989『原型・模倣型による平安京以後の土器様相』『中近世土器の基礎研究』V 日本中世土器研究会
- 伊野近富 1993『古代～中世洛外土産土器器皿の生産と流通』『中近世土器の基礎研究』IX 日本中世土器研究会
- 宇野隆夫 1981『白河北隣北辺の土器・陶磁器』『白河北隣北辺の調査』京都大学埋蔵文化財調査報告II
- 宇野隆夫 1982『井戸考』『史林』第65巻第5号
- 大橋康二 1985『肥前磁器の流れ』『季刊考古学第13号』
- 大橋康二 1989『肥前陶磁』考古学ライブリー55 ニューサイエンス社
- 大橋康二 1991『肥前陶磁の変遷～文様を中心として』『柴田コレクション展』(II)【資料編】
- 大橋康二 1992『近世における肥前陶磁の流通』『国立歴史民族博物館研究報告第46集』
- 北林八洲晴 1968『青森市の原始時代研究録(1)』(単)
- 北林八洲晴 1971『津軽半島における擦文土器の新資料』『北海道考古学第7集』北海道考古学会
- 北林八洲晴 1983『古代(奈良・平安時代)』『青森県の考古学』青森大学出版会
- 工藤清泰 1983『中世(鎌倉・室町時代)』『青森の考古学』青森大学出版会
- 躬見和夫 1992『井戸をめぐる祭祀－地域的事例の検討から－』『考古学雑誌』第77巻第4号
- 工藤清泰 1988『浪岡城の発掘調査から見た北日本における中世城館研究の課題』『よねしろ考古』第4号
- 佐久間光平・本田泰貴 1990『東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題』『東北大埋蔵文化財調査年報』東北大埋蔵文化財調査委員会

- 佐々木達夫 1985 「物資の流れ－江戸の陶磁器」[季刊考古学](II)【資料編】
- 清水菜穂 1992 「「かわらけ」考(2)－今小路西遺跡出土資料にみる中世前期の土器様相とその画期の検討－」[中世都市研究]第2号
- 豊田宏良 1987 「擦文土器にみる貼付画続帯文様の分析－馬蹄形押捺文を中心として－」[画航]第5号
- 半沢紀 1989 「飯詰高櫛城に関する諸問題」[津軽平野]第1号 津軽平野歴史と文化研究会
- 半沢紀 1990 「飯詰高櫛城址採集の陶磁器について」[津軽平野]第2号 津軽平野歴史と文化研究会
- 半沢紀 1991 「琴湖岳遺跡採集の陶磁器」[津軽平野]第3号 津軽平野歴史と文化研究会
- 半沢紀 1992 「津軽地方の近世窯業と陶磁器について」[津軽平野]第4号 津軽平野歴史と文化研究会
- 福田友之 1987 「津軽・稻庭村松枝遺跡出土の擦文文化資料」[北海道考古学]第23輯 北海道考古学会
- 松本建速 1993 「柳之御所跡出土かわらけ編年試案」[研究紀要 X III] 御岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 吉岡康暢 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」[庄内考古学]18 庄内考古学研究会

写 真 図 版



この写真は、米軍撮影の空中写真を建設省国土地理院の承認を得て、掲載したものである。
(昭和23年5月18日撮影)



この写真は、建設省国土地理院の承認を得て、掲載したものである。
(昭和50年撮影)

写真1 内真部（4）遺跡周辺航空写真



調査区全景



遺跡遠景（→東）



遺跡近景（→南東）

写真2 遺 踪 全 景



トレンチ掘削（→南）

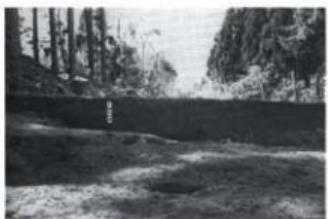


遺構精査（→西）



重機による市道の砂利除去

写真3 調査風景



基本層序 (F・G-34ライン)



SB02



基本層序 (F-32~33)



SB03



基本層序 (F・G-20)



SB04 (一部)



SB01



SB05 (一部)

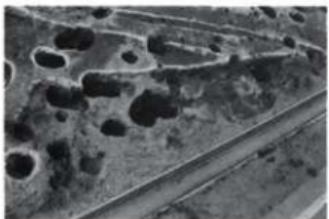
写真4 基本層序・掘立柱建物跡



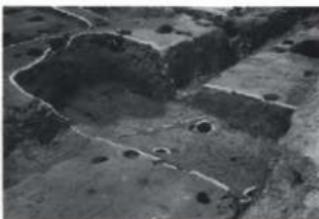
SB06



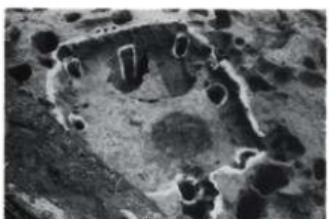
ST04 灰ビット



ST02



ST06 (→東南)



ST04 (→南)



ST06 (→西)



ST04 (→西)



ST07

写真5 SB掘立柱建物跡・ST堅穴建物跡



ST08



ST03 (左), ST09 (右)



ST08-I 土器器坏出土状態



ST03



ST03 (左), ST09 (右)



ST09



ST09 炭化材・燒土検出状況



SK01

写真6 ST竪穴建物跡, SK土坑